俳句日本

九月號

第一卷 第四號

俳句日本　第一卷第四號

海紅句錄……中塚一碧樓選（一）
層雲壇……荻原井泉水選（二）
陸集……西垣卍禪子選（二六）
指針を記す（二）……中塚一碧樓（三）
開目鈔（二）……荻原井泉水（三四）
句評……（三六）
各家近什……（三八）
南方だより……西垣碧禪洞（四三）
昭南より……中田紅甫（四四）
句席……（四五）
句輯……（四六）
みいくさ集……

表紙　望月春江畫伯

有隣亭蔵書

海紅句錄

一碧樓選

東京　安藤　次郎

大きな機械とあり工員が赤いとまと喰ひをる
赤いとまとを食べ工場のうち風がながれ
ぼくら機械をまもる窓の夜中の空夏の夜
飛行機一機の組立をはる草のみどりに

〇〇隊　羽根田繁時

不屈伸びる草々や眞向吹く風
雲かたまり麥の穗の穗のうごきやまない
芋畑風にゆれつゝ軍歌うたひつゝ
立哨このとき蟬なく樹の幹の艶

沼津　伊藤彌太

山から見えて夏の日ぐれの町すぢ一つ
夏夕なぎさ波あり漁翁があしもと
多瓜に玉葱に圓さある關心事一日
大暑草もかまきりもしんとしてゐる

石川　松原颯々

家々麻のしげり配給のものゝひるめし
畑もの數藥のうへ土用いちにちくれる
稻の花咲くくらがりに焚きいくつも松明
夜も匂ふ梅干兒らがゐる門べ

〇〇隊　矢崎博敏

夏の日山畑とはなれる山水を飲む
月見草の花へわがからだうづめる
夏の日どこまでも空と船團
夏草がうごく兵の一人の顏

宮城縣　島林庄作

夏海が迫る穗草穗うごくに立つ
あをあを草刈る人々草を背にくる
穗草穗ひく〳〵天一方の雲
轡を掘りあげてからの夏の雨ふる

越後　細山金剛

託兒所にぎやか桐の花にぎやかに
朝なれましぐらに踏む土麻畑青く
さゝげ畑麻畑大空うけて棲む
さゝげ畑夏果てる色に山鳩啼きつゞけ

〇〇隊　本間昇

兵と農人と芥子畑けしの花に微風
咽喉いためし朝に來しねむの木の根もと
君の白衣を云はぬアカシヤの花散るを云はぬ
摘草芹もつむ一方へ水流れる

佐渡　金子璽人

道を曲りずつと立葵の畑
籬をうしろにして默禱す午の陽うすい
菜の花道を濱に出で人の居る方へ歩み
山を下りて日中堺外の凌霄花

香川　新田巢州

牛を追ひ來り少年夏草をふみ朝
夕べ池の水枯藻の赤くなりたるを集む

蟬が窓からとびこんで來る夜空明るい
珠數玉の木をぬいてすてる眞夏に向ふこゝろ

大阪　大倉芝青

警報解け行き交ふ人々にみちのべの草に陽さし
草の中の兵士我等の顏を月さし
工場と工場とのあひだに日南夏の日
菜種の花さきし畑のなかの人の顏

備前　赤松榮三

馬と共に在りわれら一隊夏草のあるところ
一つの窓をもち家人に梧桐一木
練兵場草青し夏雲に呼びかけたく
苞麻實り南瓜實りし敢闘日々

備前　岡本草二

青蘆を刈る朝川を川舟のぼり
蘭草刈つて干す家の四方がたんぼ
炎天草が匂ふ家に軒あり
夏晝こゝを去つてゆく水兵達の足並

新潟　三雲城東

人征けり山にくれば匂ふ茨の花
竹の皮散る挺身の男盛長い
燕の子みな巢だたず雨の日この家

名古屋　平井青三

漁船いちんち動かず夏の海いちんち微風
晝寢さめて坐す海を見る海がふかい
山姿神國早苗田に吹く微風あり

宮城縣　谷口矩良

麥を燒く朝の一方より霧霽れてくる
大き建物にかゝはりなく池の睡蓮花
田草取る人の見え隱れ青田を流るゝ霧

佐渡　石塚碧郎

春うす雲うごくともなく柴刈る山の上
土用浪たち一日雨ふる岩々のならび
石段一氣に登る立葵花さき

東京　下平天耳

蓮田風つよし花の高さを鐵路
千葉は石なき墓原の茅花ほゝけ
どの家も夾竹桃咲き待避壕多くは無蓋

秋田　石岡水鳴

歡喜水音こもり夜に筵を沈める
若い雄鷄一羽ゆく夏の地に雨降る
熱風このときの海造船工場へひゞき

宮城縣　齋藤達也

恩賜のカンナ赫々と五訓默讀す
憩へば月見草咲いて山療は暮れそむる
芽木の光にかげをつくつて山の學校が音讀す

北支　万代鰌平

小型のナイフで皮をむく取りたての青い林檎
兵旋盤を使用す汗を流して去りし
大地熱風深夜木々は鳴りつゝ

濱松　伊藤雅章

牛を飼ひ牛を使ふ今年の田鋤はじまる
棲んでゐる灯がともつてゐる五月雨

からぼん若い二三人ボート借りに來てゐる　備前　黒瀬潮鳴

夕べ井戸端からきりぎりす見えず鳴く
干潟に人の來て炎天藻の匂ひ
をんな黒髪あり茄子畑に水やりたくて居り　〇〇隊　大淵青柴

山頂近い感じ雪の殘りを口に山を越える
散兵野の草の暑さに睡蓮咲く沼べ
兵舍近く夏朝の麻畑麻が刈られた　青森　工藤折葉

宵宮よひはやく來て一八の花ある水邊
かな〳〵鳴き栗の木の青毬いとけなき搖れ
夜空をずつと夏雲の月によりつゝ白し　〇〇隊　中　恒三郎

子馬が親馬の前うしろを走りありく夏山
爽涼山がね山が背の一方日のてり
全體いてふ大樹このとき蟬鳴きやみし大氣　和歌山　保田重藏

旱天甘蔗畑と私と兒らと
夏空まつさを飛行機山から山へつゞく
このごろ萩の花咲いてこの學校が山の中　宮城縣　土屋國男

國を想ふ人々に桃の實の青し
枇杷の實をもち言ひたい事を言ふ男
來れば神域夏木ゆれる尊し　備前　二宮香芽子

星二つ流れ星光る夏夜
小さいおほばこ茂る庭ありて病室
さるすべりの花搖れてみどりこき薬かげ　東京　坂岸桂保

征く人征つてしまひ生姜畑の香ひ
雪朝女子驛員笑つて居僕ら乘車す
小溝の水凍てし吾等が歩調正しく　會津　渡部東迷路

石鉢の水を打ちて山から來る風
藤棚藤の實水にうつり日暮るゝ
地面暑く松葉牡丹地一面　長岡　藤田三六亭

泥水のひき殘り草土手の月見草
舟は瀬鳴りを切る水面を掠めてはつばめ
汗目にしみるまゝの兩手の機械　信濃　中村仁

朝雲大きく影おとす木槿花咲き
茄子籠を持ち息子の事を話しをばさん
道まつすぐゆけば葱坊主ゆれてゐる　秋田　高橋安榮

密生紫蘇畑も朝の河もはれて來る
ひま伸び黍のびし我が家への徑
試歩すひまの莖太く朝夕　東京　上木葉

夕凪すたすたゆくに逃げる海月と死んだ海月と
いま月見草に顏よす一人の女工

日陰りのみちゆくに一つ二つ栗の毬落つ　　備前　豊田芳生

夜の疊に落ちてゐてこれは石榴の堅いつぼみ　　新潟　丸山白水

工場窓ひくゝ蓬草は長けたり　　備前　豊田青坡

とまと二つ三つ臭れる畠露けく　　備前　仙田黄蔦

小溝あり紫陽花しげりしをとこ　　島根　逸見孤舟

眞上から日がてり除蟲菊咲いて島の畑　　尼崎　森松多美子

男甘藷を植ゑる畦の野いちご赤い實　　備前　丁字路

一日の働き風のある甘藷畑　　備前　森久子

親かにと小がに夏夕水のしたゝり　　京城　浦麥水

夏朝みちぬ心のまゝ撫子一本をぬいてゆく　　佐渡　瀧浪龍雄

無言で水をやるこの朝裏の茄子の花　　八王子　小坂眞二

土嚢に輕機据ゑ射程測るに豪雨　　熟れし胡瓜の露ひかり朝日は照り

南瓜の蔓が伸びそれを跨ぐ朝　　遠雷夕暮月見草の河原をゆく

かくおだやかに話す母で七月の夜　　宮城療　村上幸記智

畠のものみな乾く山脈に動く夏雲　　炎天地に這ふて歌ふて除草の女達

祈念大いなる山あり栗の木花さく　　新潟　丸山白水

前線に通ふこゝろ砂濱晝顔が咲く　　尼崎　森口芳子

船渠の向ふ月見草が花盛り朝凪　　尼崎　橘本きよ子

一叢たうきび熟れ誰もゐない廣い校庭　　島根　逸見孤舟

訃をうけし梅小さき實りが見える　　尼崎　森松多美子

夜業より歸り來しわが部屋の金盞花　　尼崎　近藤歌子

南瓜の中に一輪の朝顔風にゆれてゐる　　尼崎　森口芳子

コスモスを活けて朝を出て來た私　　尼崎　橘本きよ子

夏晝鐵屑をこえてゆく白い蝶が一匹　　尼崎　森口芳子

きびの葉のゆれるがまゝ飛んでゐるとんぼ　　尼崎　森口芳子

汗をふき〳〵菜畑に立つて朝　　尼崎　橘本きよ子

南瓜の葉風にゆれて工場うなつてゐる　　尼崎　橘本きよ子

警報の出た夜の思ひ〳〵にて見る月　　東京　松本薫

眞晝畑のいろ茄子の葉がゆるゝ　　東京　松本薫

屋根の上を朝露が一すぢ　　宮城　小野寺青愁

霧の中から白鷺そして霧の中高粱も　　宮城　小野寺青愁

足の白さ夏の日の暮ひとり　　宮城　小野寺青愁

帽子白い太陽白い眞晝　　諏訪　守矢自由也
その川にその水に殘暑　　備中　上田默平

海紅近作鈔

今朝色の茄子にもの言ふ男　　愛知　鈴木初枝
母と默しゐる晩夏の山をまへに

夜を集ふわたしたち山梔子咲きし　　立川　小川夕舟
人と話す百日紅の花更に赤し

乾草にほひては雷雲くづれ　　新潟　八木茶凡
朝蟬鳴く出勤の白靴揃へてゐる

子供等一日をあそぶ夏の川水あり　　尾道　美原素子
干すものにいつか日暮れし露しめり

〇〇隊　豐永吉次郎
かまどに干草赤く燃えてわが居る　　備前　桂四郎
草いちごありて子等に赤い夕陽

〇〇隊　山下まこと
月の出を兵はまちつゝゐる兵ら　　滿洲　佐藤靜月
草花の色を見しわれら更衣

備前　二宮知子
この家を守りぬかんさるすべり咲く

諏訪　守矢自由也
國に應ふる農婦稻が土用穗

坦々地のひとところ深き夏の井戸　　丸龍　吉川舟人
無性に青瓜をくつてをる二三人空の兵隊

向日葵の花と夜干のきものとある庭の邊
一摑みも多く藥草をおほばこなど採る子たち

御膳に吾が子を遣り江に潮引けば夏夕　　諏訪　武居泊雨
夏よふなばたふなむしよろこべり船の走り

裸にてそこに苦汁をはこびをへしかの人
蟲つき梨や小さい梨で家に持ちかへり

夏吾が子小さき足音して戻り　　東京　星野武夫
摘み桑籠に滿たない蟬がなく

青いとまとに日がくれる地のつゞき工場
向日葵が咲く水をのみたりし男

防空隊のひとりとし夏夜の雲のひかり
少女がひとりこのみちをゆき草がいきれる

雨ふきこむ窓をとざし櫻桃をたべ　　東京　星野武夫
草が雨水に浸る少女工員出勤

干草供出の草がまだ青く井戸があり夕べ

夏椿のものなど生える隣人と話し或朝
梅酢のはいつてゐる甕に風のとゞきこの夜

東京　山崎多加士

大きい歯車ちいさい歯車こゝから工場全體が夏
佛縁そのやう牛の顔の炎天
たうもろこしの畠ゆく人が荷を背負ひたり
蟬鳴く、ところを通り路を歩み來れり
窗あり背なか押しあてゝ裸

在佛印　梶田羊介

あかときを眠り椅子に霧流るゝまゝにこまやか梅檀葉のありて霧朝を發つ
藪沿ひ高い處の低い處の鶺鳥みなうごく深緑
夏の雲あり藤蔓は手繰り寄せて切捨つる
塀際の白い花いつの日か人に好まれし白い蔭花

羽後　杉村木々人

幸次郎その黒馬と夏知らざる如し
炎暑老夫婦ありにらの花咲き
石工一石と生きる殘暑石材多きを
少女白服でゆくに道あり青田の中
殘暑となり波止場一隅に釣糸を垂らし

備前　松本西平

僕病み家の壁白し十薬の花白し
雨ふり母が茄子苗を植ゑる姿
炎天人去りしこゝに百日紅花咲き
芙蓉花咲けば大潮の港に游ぐこどもら
夏夕曇つて來て蟾蜍青き羽根あり

京都　西山刀耕

麥刈つてあり麓を見るまるい衣笠山
落花生葉を開かずゐる學徒ゐる戸の口
學徒としやすりの粉の匂ひて黒い夏服
うつすら明り自作いも蔓差出てる
軟風いも畠をかへり見る旅人

東京　吉澤稻市

畑けから出した草がしをれ畑け一日人が居る
水をもらつて飲み何か花の咲いてゐる其家と青空
庭床母家物置の屋根日がな麥の棒打
今汲んで來たばかりの水がうごいて居り木の枝

京都　川島南海城

朝畑に出る我等に湖水あり家に父祖あり
芋畑から見え舟の底へ流るゝ海の汐筋
一日を母は暮るゝ芋を掘る藪が近い
母人飯を焚く姿戸を開けて柿の茂り
農場地に庵があり少女に山に殘照

無湖　米田稻介

地にしむ多の月てりわが家戸をあけてゐる
弟亡し大陸麥の芽どきの空ひろし
一機いま離陸草のなびくにわがたちつゝ
家のうちに防空壕をもち燕鳴く日々
青空爆音ひびき樹のみどりとわれと

小田原　堀川屈人

風は山から、海岸のわたし裸

夏雲大きなかたまり風に動かず

みなくさかりびと高きくさ山にあり

この日くさぐつとつかみぬく里芋がある

秋田　足達　矩水

炎天秋を感じとさか日中のいろ

夏の日正午のけはひ壕の入口ひくゝ

少年手旗を夏樹うしろにす

二三本は荻炎天砂のいろと

秋田　相場　汀石

應召この家枝豆を食ふてる青い簾の皆さん

夏の日鳩がなく木と思ふ木の椿

夏の夜藻の花のこの潟暗い

大根をぬく朝の涼しさそれから飯食ふ

長野　御所窪けさじ

桔梗の花が毎日咲いて干しものに日ざし

蟬とりの子らに太々し御神木ありて

炎天廣場に銃を構へる一歩前進

防護團員整列をはり灼ける地面に影し

岡山　山本　光王

父母とあり家にまぢかく夏山

雨降りこむ溝深くたでの花さいた

日々暑い少年工がつかひなれた旋盤

夏夜父とあて潮入川の潮さしてくる

栃木　黒丸　古生

縫ひかさねて白衣縫ふ人々合歓木咲けり

壕掘る人ら炎天壕に少し水湧き

潟が夕日に照り返されてる西瓜が舟で着く

姉のこと母のこと月見草一ぱいの堤に起てり

札幌　近藤　紫村

大いなる國ぶり山のかたち樹のいろ

土用に入る虎杖の茂み兵の一隊

夕べ地熱あり雨近き山たしかなり

われ等戰ふに土用を生き鮒のいろ

長野　半田　雨衣

袖を縫ふ襟をぬふそれ〳〵の工程窓をあけ

眼をはなさずミシンふむ汗する眞顔

とまと色づきしばらくはこの部屋にある氣持

千草などと籠にさげてとまと

岡山　笠原　大能露

桃に庖丁の錆をかまはずあてる

日照りの芋畑人の居りて横顔

月いづる大いなる十六夜の門出

遠い山近い山座敷からつゞく青田

山形　辻　午子

街人つぎ〳〵征く者の列に入る篠懸並木

日盛り學徒一群そろひて乘車の姿勢

果汁すゝる父の口もとの喪へ梅雨あけし

夏足袋仕事場に脫がれあり日ざかり

諏訪　宮坂　岱風

眞夏御宮の庭べ鳩と子供と

芦の茂りにかくれてしまふ一隊

胸を打つ氣持盆棚の林檎

とまと食べるうしろ香の煙が流れ　濱松　口田朴也

水へ消ゆる雨に咲き出で河骨の花

水車踏む男に夕べとなる畑の彩雲

水にうつる朝雲あかるく田植も二三日

雨間火を焚く住ひも森も梅雨明け二日　諏訪　山田不雪郎

決意あらたにすなつめの花を見る

音なし遠き工場のあかり田へ水を引く

こゝに夏山に戰ふきもち山を見る

地が地息が匂ふ雷遠のく　會津　渡部湘雨

道べやたら大豆繁り流れ來る水

葛の葉風渡る足投げだして女等

瓜を持ち大げさに歩いて來る少年

萱んぼ一めん遠く住んで白壁　兵庫　高輪かつ子

あひるの子みんな口あけてあるく水べ

立秋雀が吹き飛ばされて飛んでゆく屋根

老父ひそかに居りて膝のべの蠅たゝき

心勞窓に打ち伏し桃の葉風あり　新潟　金子曙山

奉公袋土に並べる炎暑必勝の僕たち

露ぐさの花など歩哨に立つ朝くる

川藻表へる朝の山へむいて船漕ぐ

山胡桃強き陽さし山みづ湧きて　大館　石田鳴子

青々田は畠より低く在りていのらむ

白い雲一片の雲が動くトマトをもぎとらう

青田がずうとあをいなかの田の道である道

夏となる夜々の星と宿直室の宿直は一人　東京　後藤零丁子

壕へ雨ふり夏の日白い蝶がゐてとぶ

勤勞學童のこゑ高し夏の日草々

兵が征く彼一兵としゆく柿の實青實

黍の穗がでる檜葉垣の内こゝに住めり　尼崎　林さあを

蓼の葉二三枚を摘み低し水おと

農女お盆を迎へ家石垣の青い歯朶

かたばみ咲きつゞける庭の石すこし窪み

藷苗植ゑて立ちけふ遠の嶺に湧く雲　名古屋　加々美絹子

炎天働く農女に棉の花木にひくく咲く

日のいでて濡れて花咲きし胡麻畠のみち

母があり茶の木青い實をもちてこゝに

さるすべりの花咲く地に一つの甕水みてり　濱松　永井はるを

半裸はだしで來た男西瓜一つをかゝへ

見あぐる楠の大樹彼方夏空あり

無風工場幾棟か建つ草生え地のひろさ

夏夜桃をたべるにすこしかたい實　〇〇隊　大川しげる

非力沁々土に恥づる松林の夏空　　新潟　佐藤豁山人

草の細い葉を見て風の強い夜眠る　　京都　松宮磨研

戰友と別るゝ日林の露草を踏むに音なし　　秋田　佐藤禾黄

確かに晝顔の花咲けり朝の原つぱを行く兵　　岸和田　牧野秋風嶺

川あかあか水草なびくへ游魚　　愛媛　菅木葉

脚絆のほこりしぎしぎしの實のゆれ

茅の穗の絮飛ばんとす山はれ

吾等どち徑ゆく脚絆にふるゝ蓼のほ

空ふかし身近の太い葱坊主

早乙女に父母あり朝を絣の野良著

けさ熟麥と六月の山の容を感じ

茄子の花咲けば垣が低ければ隣人

婦人少閑あさ空のいろ茄子のいろ

合掌あさのひろそでとおもふ

あるところどつしり石垣凌霄花はな咲き

池のべ水雞走り家の子はみなそだち

この爆音をきく新緑のなか走る水あり

虎杖を食ひ顔を尖り峯に向ける

佛手柑の苔ありことし空梅雨

茂りたのもしく通り越し別れ路

そら豆採りしあとの田であり田を鋤く大牛

山梔眞白の花匂ひ微風この朝

まだ馬鈴薯は掘らない畑このやう葦みだれ　　東京　沼文生

涼しく葉かげに見えてちぎり殘りの夏蜜柑

長堤朝つゆの草に牛が尾をふる

一匹きりぎりす間をおいてなく墓參

うり漬のお茶うけ土地のものになりきつたをばさん

座敷に新麥をひろげ雨はるゝ家

背戸茗荷の生えてゐるへん地暑く　　岡山　瀬尾一風子

茗荷が小しげりのへり倒れて鍬あり

夏朝早くそれは母が角豆を摘む

いち羽白けた夏雀と庭の樫の木

女の子蓬を干草にする地めん吹く風　　越後　中村乱水

朝日に稻の花かゞやくを吾子をいとほしむ

蚊柱立つゆふべの徑小さな鎌もつてかへる

ゆるゝなく木槿が咲いた萱葺の家

夜明けしづかに水張つて蘭田を去る人　　岡山　岡本影薫

宵星低いふるさと夏のうしほを濕へ

山頂わが行くへ草霞みたり

仔雀の鳴く密生こゝの日照草

桃不熟これが山が背に棲み

青木の實落ちてゐる青苔の地めん　　東京　根岸榮一郎

日々激闘へつゞく夏朝この海けむり
竹垣をみるたのしみ夏夕歩むに
山葵を賣る驛をすぐ梅雨空の雲が切れる
青梅を噛ぢる幼き如く幼きとゐる
東京　林　鷲水城

見なれた山のかたち夏桑のしげり夏の風
無風青田原今ぞ勝つのみ
夜があけようとする銀杏のしげり陣頭にあり
わびしさこれのちさい牛と日まはり
大覺悟空うけて池の水立つ秋
東京　今井六石

府中六祉さま欅青葉が今われら戰ふ
つぎ〳〵南のいくさにあ兒果てしことし暑さに堪へる
かなしみけふの日いつか夕立ち來槇の庭木立
夏一夕冷氣たゝかひに果てしあが二人子の二つの帽子
大き馬鈴薯を輪切りして靈位に供へ八ッ時
秋田　相澤華芳

葱坊主ちぎりとり砂踏みて行く子供
復古ごゝろに在り或は葉櫻に立てり
夏めく濱のみちあるいて大きい船乘りの人
國水田ひろびろ國日々
ゆたかに薄暑のうしほが空が近まる
秋田　木内柳陀

つれとつるゝ夏帽にして
南瓜高くつくる夕日に居り
夏籠る朝の水甕水くみ
待避壕にほひ草匂ひ
引水が見えぬ虎杖大きい葉
諏訪　山田蒲公英

水ありどの家も刈麥を干してある村
つゞけて桃を食べるその顏をして子供達
男にいちにち木材を積むしごと土用風吹く
束ねる干草が匂ふて男
人をり自在鍵あるまゝにあり夏爐
秋田　三國屋白省

その增產のじやがいもの花を咲かせないでしまふ
つゆあがり蟬がするどく空へあるやう
林かぜさわぎしてくる夏雲
南瓜雄花でひるすぎてゐる
旭の刈草のおとと野のまんなかにをる
大阪　淺野麗木

巖に手をかける胸うつ潮の匂ふを
木々青あらし馬方に馬がうごかないみち
炎天うちあげられし藻またいでとほる
炎天雀とんでそこに白くかわく舷
みちをきて口つぐむ一處たけし草あるを
山形　爲本鉛人

蟲の脚に赤き條ありわが掌にあり
雨後の土を馬鈴薯のいもをさぐる手
馬蹄の音と聞く木々繁き庭を前にす
柿の木陰にゐて青柿の青さを感ず
石を運ぶことをくり返し熱い石に親しみ

層雲壇 其一

井泉水選

庭さき瓜やぶ屋が出るとくれてゐる　木曾前田若水

あさはあさぎりの、うまは馬市へゆく

あさは、やい花の南瓜の媒介旅へたつ

おん山の水さゞ波立ち二の池小屋といふ（御嶽登山）

手のほしいものに手を、日曜けふ休日　横濱我妻魔神明

海兵の作業衣めいた之が閣下で向日葵の花（潮水氏官舍）

コーヒー沸しの理論もすずしコーヒー、熱帶魚なども（同）

上下ひく鉋の櫓夫で連山關はこの次ぎ

青田へ足ふみ水車、大阪を離れて車中

黍の葉もかげ月夜體操してゐる　横濱青木青夫

椎の花にほひくる議事堂の塔にある夕雲

梅雨に入つたらしい風の栗の花、降るのではなく

パラパラ雨落ちただけの照りつづくヒマの葉

山のかたち温泉町の軒並ばかりは昔のまゝな百日紅さく

青田一ところ蓮田の蓮の花さく朝、雨　濱松細谷野蕗

銃を肩に少年一隊通り殿様お通りになつたときの松

遠州灘土用波光芒空へ交錯する

むしろの豆がはじけとぶのも日はまうへ

土用時化のけさは陽をみせて籌草かよ

時刻おほよその務め夏朝畑してから出る　諏訪小林雪後

かいこもすんだまどのあけはなした灯へ訪ねる

葉のある石がすわり灯のとどく夏が夜る

街路樹が晝頃警戒警報人々正しく歩く

山がまだ暮れのこつてゐてげん灯を入れた電車がゆく

葵の花で白いてふてゐる留守の戸がたてゐる　東京櫛本淳一

お暑いことでへちま五六ぼんさがる

ゆだちにはだかでゐる

慾なやことしも盛り火を焚いて大川のながれ

炎天のさびしさ一羽白い鳥ゆく脚をそろへ

蔭寛をくる水をうけてある　明石三好蕾一路

み國いま、こんな簡素なつまようじ一本もち

兵送る十人ばかりで通り家と家の間もうれ麥

雨のあと何やらにぎやかな畠にきてひとりで

ラジオがラジオ塔でもみぢが赤い小さな枝はれてゐる

この日、硝子繪のやうな空のそのおくにある現實（サイパン報）　東京岡野宵火

獨りひるめしの旨く飯の中の豆のうるはしくたうべる（病床にて）

夏は來ぬとうたふきけて窓熟れ麥のひろさみゆる

立話しのひとのこちらを向くも夕べ家のちかくかへりき

海のやうな麥、の波のやうな風が、少年手旗信號

暮れるまで本を讀みくれるまへ郭公が啼く

野いばらのはな道ふるさとにちかく　伊豆　佐藤專子

永いいちにちの今日のいり日いちめん植田

父のかたみのかみそりけさ涼しくひげそる

艦隊一部出動雄大なる夏雲である　但馬　岡田琅玕

ここをわが村として蜩なきいでし山のかたち（轉任）

牛が通ると少しおくれて少年、夕やけ

作業奉仕の一隊が通る栗の花が塀のうち

夜もあついトマトの皿の鹽がちよつぴり

ほほづきの紅い小徑からお祭りへ行く

波の上走るしぶきの波の下かへす波の土用三郎　長崎　森久樹男

貸本屋の隣少年工ばかりでところてんたべてゐる曖靄、天の川

夕日が赤いたうきびの毛にお盆がきてうちは初ぼん

家うらを電車でお盆すぎの南瓜のめばなをばな

海から雲のわく山で高射砲の音ベンはベン皿にある

遠くから、かみなりが海のある學校の避雷針放課後　横濱　東松八洲雄

丘は麥秋の重爆らしく編隊でゆく

炎天裸身配管作業風は海から吹く

藤棚の藤咲く局長とその娘三等郵便局

紅い芽青い芽の一寸腰かけて公園ところてん

月があかるくて電波たしかに鳳來寺の佛法僧なく　大阪　南川鴻亮

草がそよげば桔梗の花風ふけば山のいただき

蓮の花のあめ雨は海からはれてくる

裏はすぐに田の旱田をまへに質屋の黒いのれん

雨、葉に落ちる音の山を下る　東京　落窪京太郎

子供に見せて朝は朝日の建國體操

夏夕べめづらしく大きい月、わたし神樂坂をのぼる

へちまに秋の空、しづかなる女の客とゐる

鴉がむぐるとあちらにも鴉の、芦に波　岐阜　水谷青杜

乳房にねついて遠かみなりになつてゐる

實になる蓮の、蓮の葉に音して雨ふる

たうもろこしの花の、ほんぶりになる

朝のうち日がさしただけで曇つてしまひ交番があつて櫻

女の里も枯芦の、ひぐれまへにはつきたいなどと鱸の音　靜岡　澤木正

白い干しものに風があつてしろい雲がゆく

しづかにくもつて遠雷、默々としてたがやす

南瓜の花あさのうちはすずしくくもつてゐる

砲聲はるかに轟き炎天南瓜のつる

ひと雨あつてからはすずしい芋の葉牛ひいてとほる　石川　高崎貞之

花壇にそばの花さかせて日曜を授業してゐる

ふたばからほんばがのぞいてゐる雨

田うゑはじまり候かつこう鳴き居り候

砂に芽が雨やんでゐる

かみなりがぬらしていつた庭へ下駄はく

熊本　木庭皓龍子

鐘が暑い空氣を裂くやうに講義が終つた白い雲
青葉しづかなあめ檢査場もひるめしとなつてゐる
かなかな一つでなく連れて鳴く川が瀬音になる
お墓所まひるの杉の影深く白い蝶々
一寸御無沙汰したので月夜夕顏の白く（紫陽花居）

東京　村田藤庵

夕立虹になつてから出る馬車のわたしが一人で
瀬の音、向ひあふてたまたま釣れてゐる
向ふに船の汽笛が岬をまはれば外海である雲
茄子の花にも雨のない今日も海にある雲
降つてからの青田となりお寺と小作の四五軒

松山　村瀬汀火骨

梅雨のたかい日和の潮川にかかつてゐる橋
風が、月にならうとする枝
土瓶にサボテン咲かせ爆音のいちにちある日
また降つてくる春雨の遠いふねのふえ
蓖麻の葉たくまし日でりあめ

福岡　津田笹彦

夾竹桃に風がないときの藏の錠前
傘さして通り地下が灯してゐる
つゆの月はふけてからさしてゐる松の木
山より低くたなびく雲の英靈この村へかへる朝
涼しい月となりぬれた竹林のよこ路のある

東京　宇佐美一歩

田植頃の蛙の聲も、管制してゆく月の夜汽車で
夕立上つてからの爆音が神宮の森のその空
かぼちやのつるもとなりどうしつきよ
寢るときの月が庭さきのはたけ

東京　木村乙羊

夏草のどぶに咲いてゐる花のまだ來ないバス
星の雲月のある雲がばくおん
ぼうぼう原つぱからくる風の向ふもくもくと燻えんとつ
まつすぐな道をまつすぐに通る夏の朝まともに照りつく

弘前　竹内竹童

汗かくほどの暑さになり青田順調ですこし風ふく
しづけさは陽のぼる前の畑の芽出揃うてる
寢てゐるだけの朝の空、晝の空、夜の空は秋
お山にのこんの雪とりんごの花の白さと月夜
征くに禊ひを神のおん前八重一と木まんかい

銚子　名雪理輝

たまには日のあるうちに戻れてつばなの穗
みかんの花も散つてしまつた門このごろつゆ
垣の內にして一畦の諸づるはひ出してゐる
午が食んでゐる草の匂ひの日暮れて通る
青田四五枚そのさき內海汽車でゆく

新潟　皆川蓼二

佛の花とて牡丹のしろさお蠟をけす
青葉の雨へついて御酒はありますといふ（岩船湯澤）
雨の中あんまの笛雨の中河鹿のこゑ青葉に降る
ひるからは潮騷の滑空訓練場の吹流し
君七つ釣でかへりあら海の巖に鵜の鳥

雲が通ると雨が降る雲が通る栗の花の上　栃木　植田市籠

朝風豆の蔓夕風芋の葉母上すこやか　朝鮮　本多閑嶺

夏のうぐひす吊橋の向ふにも宿が一軒ある

女湯上りといつた姿で沒り日の山のあやめの前

雪山を遠くに田を植ゑてゐる橋の柳に風があつて夏

一雨晴れると夏がきたやうな舟に艪をおしながら　福岡　鹿谷皓樹

何げなく朝顔咲かせて海、この家譽れの家です

雨止みて日の照り繼草吹く風の海浪立つ

海のいろも朝のひまはり陽にむいてゐる

橋から海が見える雨あがつてゐる青葉

水は山から流れてくる夜明けまへに降つた桐の木　東京　佐藤康治

夜の木がぬれると月になる

一年中でいちばんながいといふ日が昏れてきた石

日々ばくおん日々石榴が割れてゐる

ゆさぶるとなんぼでもおちる木の實がふるさと

星のすずしさそれとなく今晩もなかのお盆　東京　金子露郷

月と雲と涼しく膝にして此子の誕生日

へちまの花朝がくもつてゐる病人でゐる

配給のうどんがあつたのを熱くして風邪ひいてゐる

春になつた雲がとほる癒つてもう一ン日休勤んでゐる

北風、教へられた道に出てまつすぐ　東京　淨心寺淳

朝からけふは人の來る日で雜草が家のまはり

一つの荷物を二人で持ちて右も青田左も青田

屋根まで南瓜の蔓にして此ごろ空の爆音

泊りばんの月が光をもつてくると豆のはいつた御飯夕食　京都　荻原荻

かぼちやの花に朝日、ゲエトルで出掛ける

機械の騒音の中で夏の夕ば話した解つた

かぼちやの花と大きな葉と待避壕の入口朝日

松の枝の南瓜の今宵の滿月　山形　佐藤逸仙子

からつゆのかはらのこいし

荒地野菊に雲も暑い日の兵隊さんに逢ひに來てゐる

やまへゆくひともこないなつのやまむら

おほはしこはしこのごろくらくてみかつき

雪の夜のしんしんと針の靜かにゆれてゐるアムペアメーター　栃木　日向野秀策

煙と屋根と夏がカーバイド工場の遠景に波よせてゐる

水の出た杭の五六本に烏の、暑い日てるばかり

春たちし浪の音の朝は風いでゐる

いしぶみへあめがはる

からだぎつちり負ひし雨しづく戰地へ征く　栃木　植田正條

たそがれごろの青葉をうつし植田

まんまるい月がはなれる森がおまつり

一雨通つたはすの花海軍士官ふたり

ま夏ひるの旋盤やすませてある一りんざし

岡山　近藤次良

田が夕空となつてけふもふらない大きな松が二本
何もかも柿の葉の中青い實も暮れてくる
どつさり草を負うてくる山から朝日さしてくる
田舎の子と都會の子とひぐらし鳴いてゐるくれ方
岐れ道が一本になつてからの月の松が一本

秋田　增村辰郎

警報の灯をくらくしてゐる廠には馬鈴の藏も
碧空から爆音いちにち草とり機押す仕事
朝虹、道に背の草こぼしたり、ゆく
月夜包ふて供出の干草銃後全し

佐賀　松田一男

家のまはり南瓜這はせてたまさか家に居る
妻のもんぺすがたも南瓜の花を咲かせてゐる
祭壇の君の御姿遠く怒濤の聞ゆ（弔渡邊大佐）
停車場の裏が月夜となつてゐる南瓜の蔓

沼津　内久根聖巳

草が夏の日の、うしぐるま
水兵さん白い夏服で雨はれ白い鷄見てゐる
ひまはりの花はたくましく海軍施設部入口
波が波打へ巖はしづかに征く日を待つ

東京　伊澤元美

春いまだし決戰非常措置要綱
ここにも我が生徒作業衣の汗のしみ機械の音のその中
そのそばも一つ新しい防空壕の月の明るい
家壞すさまの夏朝の今日も暑くなる日ざし

福岡　原實

明るい雨を女傘かりて歸る
子雀がとんであるき道の暑さ
日くれてくちなし幼き思ひ出にほうて白し
牛の腹帶しめなほして炎天、青田になつてゆく

馬山　山本木天蓼

水にうつる渡し舟と麥がうれてゐる
ざくろの花赤くてこども水くんでゐる
さあつと雨くる繭のしろさも供出
朝は露とかげと、露草さいて

東京　夏堀望子

柿の花ほろほろ落ちてもう日影の好い道
とぼしくともと胡瓜の花に茄子の花さく
となりのざくろの花今日は坐つて針持つてゐる
畠も生垣も南瓜の花のあけぐれ爆音

栃木　栃本よし雄

劇場前ちよつと青い木があつてふてふがせわしない
待避壕が月かげの蒔いたものの芽らしく
ふつと梅雨のよい月にして梨畑の一軒
梅の花白し挺身隊としてゆきもどりいちれつ小い驛です

福岡　品川幸一郎

涼しいうちの港が製氷會社の屋根にゐる鳩
月があかるいあした咲くものがねむつてゐる
船宿ざくろの花が夜明けの海にふるあめ
講堂と枯木と西日になつてゐるオルガン
朝はあめはれたからたちの花で

濠北派遣　山本耕生

林間インコ飛んでまだ暮れず海は夕映え

朝はのたりざうとよく凪いだ海で顔を洗ふた

月光に濡れて椰子の葉その下の天幕に戻る

河内　大西八紘子

もう月が出て蟲ないて少年工とはなしてかへる

吾子は戰ふこの島のどこか一つである地圖

これが餘史郎さんのあた河内の月夜ですいつちよ

濱松　内田六郎

皿にセロリーの白くラバウルにある子よ

柿の芽葉になつて雨子の便り來さうな

かきばら芽ぶいてゐる今年の白いてふてふ

茨城　一色如佛

捷ちぬくための戰です踏んでまはして水車です

棉畠も綿になれば夜になれば天の川

梅が匂ふので月が出るので藏と藏との間

長岡　小原甲波

栗の花べつたり落ちてゐて日々青天訓練所

白雲ポプラの葉がそよぐ程の移り行く

トロッコ押してくるまた一ッ押してくるきりぎりす

名古屋　久保源三郎

こども疎開させた夕べの蚊がなく

土運ぶ學童の列に轟沈の歌夏雲

こどもの唄も日ぐれどきの早瀬の音も

松山　佐伯美則

島が夕日の餘映を皿にのせてある桃

空の美しさは爆音が曳いて行く飛行雲である

日が入ると月が色づいて來るトマトに水をやる

横濱　小林不惜

踏切番居ないやうなくじやく草の花が眞晝

きかいの音それぞれに廻る音の青桐朝の青い影して

山に山百合が白いので夕月が白いので

熊本　石原元寛

つぎつぎみそぎの茅の輪くぐりて女兒らもんぺ

夏蜜柑のすつぱさも妻子づれの長旅にして

雨のふらない夾竹桃で防空試驗吹鳴

兵庫　金平二火

雨あがつた朝のぐるり青い山ばかり、さくらんぼ（信濃丸子）

杏の實や胡桃の果や山の湯山の街の此の道

旅を旅に立つ夏朝の蜘蛛の巢にかかる青い葉

在東部　法雲寺三郎

法華寺らしくて夾竹桃咲く垣はげんにんじ

星座が美しい照射開始の命を待ちゐる

たくましく竹煮草とて繁り風日ざかり

東京　角田重信

あかるくなつて月が昇つてくる空の屋根

みづがめ水をみたしあめが昏れてゐるかな

丘があつていちめん青田白い土藏日がくれてゐる

川越　横關碧樓

羅漢さんめいめいの顔の世の中若葉青葉となる（喜多院）

青葉の葉がちるさらにしづかに朝の日うつる

明日とは言はない今日唯今から梅干赤い

富山　高橋政二

蹄鐵屋さんおひまで山の町桐咲く
海風、魚干して杏の花の咲きました
そこまで水田になつて豆粕が來てゐる驛で

阿蘇　白石默忍禱

藁家四五軒と冬木と煙ふく山の風景が障子硝子の中
霧ふかい月見草のまだ眠つてゐる家です
空襲解除の山から明けてくるかなかな

駐〇〇　加藤裸秋

家並切れると紅梅さいてゐる號令換銃
鯉の種をかつて貰ひなさいとかいて兵隊になつてゐる

東京　木村飛泉子

ひぐらし、驛は通過列車は風のやうに
水音草に暮れてゐる

信濃　關口江畔

咲いて野茨疎開の人の子も通る
朝は涼しいささげの花、仕事にかかる

神戸　野中白浪子

四月の野が山が、暮れ時の桃の花かな
ふるさとの夏の月夜が庭木の枝の間

松山　高橋一洵

ひぐらし、堂がある延命地藏とある
月夜波をわたる手をひく

三重　小松途從

道は青田のはればれと軍裝の兄征く、つづく
五十にしてお召をよろこびとして月に酌むも

但馬　平位青水

半日雜草をむしり桑畑桑の葉かげり
ぎすちよんちよんとないて晝ばきうりのすもみのすつぱい

横濱　新納香樹

朝は新聞に先立つてニュース紫陽花のはなすがすがし、
垣根に白い山梔子の花朝早く犬が通る

豐橋　片山承次

潜水艦の噂も櫻ちる太平洋を前の港町
柿の花ちるほどなあめはれてよりしばらく夕べ

茨城　長塚映栗子

管制の夜が明けてきた空青いいちじく
どこでも南瓜の話うちの南瓜に日をあておく

德山　青木水仙花

りくつツぽくなり涙つぽくなりからたち花さく
サイレンではない舟の笛がくらい夕顔の花

平壤　加藤運兒

かくて我等それから鐘の音敵國降伏祈願
入海雨ふる松の木に雨ふる

仙臺　芦立陶抄子

月が畠の青いもののかげ

函館　並木綠朗

かもめせはしく鳴き交ふと濱のにぎやかになる人達

新潟　目黑亮助

雲のかがやきに葬の鉦打つか

神戸　磯崎雄一

朝は新聞の小説も讀んだあとのさくらのはな

看護婦學校生徒引率なでしこなど咲くも海が近い　鳥取　井上有紀男

鍛冶屋つちおとひるごろの青い海が見えてゐる

蓮池があつて蓮のさくころ住んでゐる人の見ゆる

暮れてくる鳥が空ゆく誘蛾燈の青し平年作といふ

ごまの花朝早い影はすずしい影の畑にゆく

籠ににほふ桃が夜るがすずしい戰局のニュース　京都　井上充夫

織屋まちの角お地藏さんえんでんいちじく青い

そろばんの上の蟻かぼちやは屋根に咲く

もくげの花もしづかに恩給で暮してゐる夫婦

竹の落葉でわいた行水の湯がけふの空

おぢいさんにゐる孫たちと夏になるびわの木柿の木　平塚　瀧山重三

雲、全く梅雨明けてゐる沼べりのポプラです

唐黍の穗、なんとしても暑い海が窓からは見える

月を濡らした雨が、水タンクの脚が雫してゐる

せんせい白い服窓の青桐青い翳する朝は涼しい

月も出潟の月見草やら療舍が灯を入れてからのこの道　鳥取　重村百堂

少しは作つた麥ほしてこのごろ夕立雲

一册青い本とどの木も蟬がなくやうな蟬なく

雷きさうな雲が出て南瓜が學校の屋根

家を出て月が山を出て滿月になる

一輪ざしが朝の花子供夏休の算術する

いろいろ話は聞いて戻つて胡瓜はなつてゐる夕べ　豐橋　鈴木折蝶

田のなかのはねつるべに旱の日が海に入るところ

朝が青葉に配給ではないしじみうり來てゐる

陽がさすと露もつて畑のいもの蔓枯れてしまつてはゐない

海軍さんかへつていつたクラブのをばさん石榴の花

家の井戸も枯れてきた日盛りのてふてふ

なすもかぼちやももちなほす雨へ傘さしていく　東京　平松星童

通りなれて道柿の若葉の影生車がゆく

警報がでてゐる月夜の草の青さを刈る

岸の柳が夏であるポンポン船がポンポンポン

一枚田植すんで雨後のたなびく雲がでてゐる

試驗場四十九號の麥です朝から暑い雲です　能登　片岡樹裏人

くさの青くあふるる新鮮さひるがほは咲く

あさひ鎌とぐぬれてあるくさ

月かさの大いなるその空のおほいなるを歩る

涼しいかぜがでてゐると夕日してゐる草

二三人夕日畑のなかにあて手入してゐる　神戸　田中井夢

鏡にそとがゆうだち

古い城下の夏の朝日がまち厚生車でくる

青田、その沖病院船しづかに通つてゐる

海が土用浪のしぶきあげてゐる木造船工場

この雨ここの田を植えてゐるとむらひの列のなか

海に月が蚊帳のなかの團扇

層雲壇 其二

駐〇〇　石川舟洋

なつぱならどこでもはえるひるの雨ふる
朝がうすぐもりのおやしろは夏の落葉してゐる
まはり青田ばかりの一と雨降らしてゆく雲
月夜の影として別れてゆく
降りざうで降らずに去んだ雲が夕暮の赤いトマト

東京　日野素木

いちじゆく月夜の屋根がぬれてゐる
少年鎌としより鍬もつてゆく日が山から出る
灯はどの家も植田からあがつたその夜の灯で
佛から下げてくるものの田植すんだあとの雨
木にあるぐみ子供の持つてゐるぐみお祭りがくる

東京　印南健治

燃えに燃えておつる星が戰つてゐる
更けていい月が防波堤に波よせてゐる
蚊遣くゆらしそれから戰地へはがき一枚
朝は軍歌の一隊が葉櫻並木坂道
日盛りの蝶がちらちらする森のそと圖書館

東京　里井正子

晝のかるい音樂が夏カアテンに出てゐるかぜ
海がくさからないでみえる小さな驛貨物列車が霧通りする
ほしがわらやの空わらや涼しい灯
もつたりと穗をもつたきびが夏ぞらをうめてゐるくも
やねの上にもかぼちや子供が子供負うてくる

東京　松岡蒼兒

青葉少し汗ばむシュルッエにて衛生學講義
サイパンを偲ぶ銀河つぎつぎと渡る雲あし
つぱ廣の麥藁帽が唐黍と富士のある風景
星空に星が動く爆音である
汀ひとすぢ朝の輝きとなるとびのふえ

福岡　武鑑青杏子

雲が降らせて通つた月の夜が涼しい燈火管制
月のぼりくる障子の桟
屋上體操するのが少女たちお晝どき夏雲
ながあめの夕方ちよつと明るい畑にゐる
まつたく日盛りの蝶々橋があつて渡る

尼崎　佐藤龍遺す

髪としてふと若しらがのいつぽん、も
鼻緒がきれた炎天石のしんかん
幼い足うら見せて寢てゐる
配給の魚やく暮れ方の風がどの家にも
蓮咲く池近くて住み井戸があつてすずしせんたく

廣島　菅無極

蟻が忙はしく働いてゐるけふも暑くなる
ニユウスは大宮島へ敵機朝襲咲いて白し
蜜柑がなつてなつてなりさがつて青い村はお祭
蝶あかたちした豆の花へ蝶がきて春
警戒のサイレンが石榴の青い實の月光

静岡　平岡國次郎

東京の人と話してゐる蕎畑のねぎ

山の方も海の方もいい雲の涼しい椅子

かなかな灯をともすころとなり水音

空の雲と木の朝日と蟬が鳴きだしてゐる

木にかかる霧の、晴れて又霧の煩白の鳴く

吹田　青鷹香

兎半分見える程な月で工場の屋根くろぐろ續く道

畑の青いほうづきも昔からの土蔵も夏は暑いこのへん（一茶舊蹟）

夕ぐれはかなかな一茶の柏原の屋並あるいてゆく

郵便箱になにか來てゐて青葉土砂降り

たうきびゆふひかぜがでてゐる

香川　大山多石

葉をうらがへす風がいちじくの葉月夜

月夜のうちはのかぜにして病んでゐる

醫者に診せるほどでもないからだ横にしてかなかな

いつお召しがあらうとも青葉の青さ朝の青さ

東京　岡本流一

軍馬の碑雪の上の道が村に入る（滿洲にて）

田圃の遠くゐる人とさらつと降る雨がようやく春

製圖板へ引いたままの線が微かに鳴く蟲がゐて

少女ら工場へ葉櫻並木の道毎日晴れ

山口　龜谷庭草

島一つ置く海が高くて椎の木若葉

つるのばすかぼちやの葉が月夜の防空壕の口

くれてもしばらくは青くさ丘のつづき松の木林

橋を渡る電車の笛がくれてくる松の木

和歌山　堤本芦城

かやの四隅は高く張ってかつこう

ひでりの水こぼし水を撒ふ

こんどこそ好い雨のきさうなたうもろこしのひげ

病んでゐてててのひらにゆすら梅赤くて暑い

東京　中村正明

咲いてはみのつてくる夏の安けし病みてをる

浴衣きて團扇の風が南瓜となりかけてゐる

その娘けふも籠さげてくるので犬がくる

蟻のはうていく方から日のかげつてくるベット

東京　鈴木ルリ

常夏の暑さのえんえんともり上る煙と火で（〇〇炎上）

霧に鳴く山鳩新聞配達の子供で來る

みんなで教はつて島民の唄岩に海が暮れる（南方にて）

戰場に殘る人々と海へ出るわたしたち海青く

千葉　關根ふさ子

灯は入れずともお祭のちやうちんつるしておまつり

おまつりのきものがぬいである蚊帳の中でねむつてゐる

別れに會ひにきても別れの劍をつるその手先である

梅の花に雨ふる日ミシンの音のいちにち

愛媛　武田桂

水が葦の葉の橋がある海へゆく

沈む陽の雲を映して川の水がいつぱい

あめのおとのしづかな川にもあめ

朝霧あるいてゐると水の音がする

京都　内藤英夫

林の中池のあつて木々に日があたつてくる朝

毎朝ひえいの山から日のでて日のあたつてくる畠南瓜の花

暑さもどうやら西日となつた道をゆく道がまつすぐ

田植のすんだ田すまない田橋を渡り行くに

栃木　鹽田正晉

ひぐらしなく流の米とき水の流れる

窓へ日のさしてくるねむのはな

葡萄棚の青房の一粒一粒の雨となつてしとど

麥生と藁塚と藁塚の影が夕日である

長野　高橋松二

ここも麥打ちのいもの花ひでりつづき

青田出水あとの青空見えてきて楡の木

ねむの木ねむつてゐるまあるい月です

滿洲國　萩原和夫

五月青空蒸溜塔が一日白い雲を流してゐる

夕べ豆の花のほの白い月が出た

朝嵐の水ひき草はぬきんでて花つけてゐる

京城　篠崎早男

傘さすほどでもない雨が水邊のあをあし

まだ伸びる葦の青さで通り雨が通つた後で

手にして桃の桃色しみじみ匂ふを

大阪　菅崎道雄

風にちぎれさうな雲を爆音

しも朝のきびしさも日がさせば配給の葱が少し

地球儀と本棚の本と月夜である

山口　小島胡市

ひさびさの東京もとまとは赤く赤く

青山へ墓地へ捌つて歩いてさるすべりの道（父、兄郎忌）

夕月の淡さは一年此の下に眠らるる

東京　佐藤葵芳

臥椅子にゐたり畳にゐたりして雲の流れる

日の中あさがほの蔓のすがれてあさがほの種のある

あをい高い空に雲がとけてゆくのを病みてゐる

長野　栗田白夢

警報のとけた山の田を植ゑてゐる

青田になつて道がほこりをあげてゐる

掃いた庭が暗くなつてふる雨

東京　和田靈南

てふてふ草に風がある遠い富士

蟬とりの子等が土藏のそばの樹

かなかなな山のこの道山くるる

東京　高橋辨吉

夏コンクリートの煙突そこへゆらゆら沈むのです

手をふりハンケチをふりけしの花がゆれてゐた

百合の花と少女のきものの花の模様と夜

長崎　長山林二

ふるさと桃の木の桃が紅さす池にうつり

そこに腰かけて入門時刻待つ間の空の木蓮の花

横須賀　渡邊功平太

曲るとまた芒の吹かれてゐる道が白く

大きな園墟徂の親しさよ外は夜となり

駐中支　杉本幸一

びつしりつゆの月はさえるばかりな露營である
朝々勅諭奉誦松の枝ぶりどれもよろし
けふの勤め了へて空が焼けてゐるヒマの葉

西宮　竹内孤明

いつまで青いトマトの朝早い出勤時刻
ここまでのばすつもりのかぼちやの手まいにち白雲
朝々、犬ひいてきて此處のかぼちやのつるののびやう

秋田　下總磯郎

こんなにみんなにみまもられてさうして二ん月の空（從姉逝く）
倉の間雨が流れる娘さん蛇の目で
悔の葉櫻の葉かくれんぼしてゐてまだ日がある

東京　堀切勤

夏がきて青々と影の深くなる山々
河原滑空練習場の月見草の夕風である
子つばめ親つばめ電線の雲の模様を

福井　小林秀洋

列日一せいに穗をもつ
山のだんだんばたけの穗が出た月夜
發電所には茄子の花こんな山の中

福岡　藤川白涼

夕立山から來ようポストと煙草屋の看板
たうきびの穗がゆれてゐる三日月さま
灯るころの水が流れてゐる家のかたち暮れずにゐる

秋田　菅原裸歩

毎日草を刈る野の一本道車の香と通る
雲のうらに月がある木がしづくする
あざつゆあるうちのかまといでをる

満洲　清水たかを

少年兵を希望す凛たる面構へ山査子まだ雹で
棉の木白い花つけた童べ牛つれて通り夏雲
對空監視所と見えて夕焼けてくると人のゐるかたち

豐橋　山本意史

井の端まで南瓜の花子ども洗だくをする
暑い日が夕陽になつた學校の屋根にゐる鳩
いちじゆくあんなに葉になつてこのごろ夕月

千葉　福本逸子

たまの日曜日は家にゐてまぐさ日にかはいてゐる
西瓜ころがしてあるひるねしてゐる見えるわらやね
暑さの中の涼しさよ胡瓜の白い花です

東京　三井不二雄

けふも暑くなる日の青桐二三本が門の内
八ッ手が朝であるみんな元氣な顔である

大阪　廣橋鋼一

疎開からりとして桐の木一本が夕風の夏
誕生日の千魚が三匹おかしらづきで親と子三人

東京　作間比露詩

土管の轉つてゐるところ月見草月が出る
歩道のほてりを裸足で歩けて歩かせる

北支　前田亜津史

こんなところにある青空汽車がくる
病む妻に菜園から二三本抜いて來て朝

雨がすずしい傘でゆくはつ夏　岡山　岡田　花野

豆腐に青ちそもかなしいこのごろ（夫病む）　會津　渡部伊津三

片明りの話して通る窓近い木々灯さずある　東京　鈴木　水帆

海ゆかばの調らべ誰が物言得ん皆れ落ちる（サイパン報）　横須賀　桐井靖夫

水底透く日のあをうみであり身をひたす　神戸　藤本馬骨

ボンボン音して岬をまはるに白波白波　吹田　多胡比左志

けふも暮れて白い看護婦さんが掃いてゐる　三重　加藤古椿荘

體温表のなだらかな線のけさ雀の聲　三重　鈴木裸蟬

箱作りのトマトの赤くなつてゐるもがずにゐる　大村　梁瀬翠水女

南瓜の軸が食べられる話南瓜食べてゐる　東京　安田爐中火

木の實食べても生きてゆけると書いてあるこの本、秋　東京　都々城二丁子

深い森があつて影、朝のオルガン　東京　龍川安彦

竹藪に雀の靜かな入り陽となり足洗うてゐる　岐阜　間宮折鶴子

風が雲を剝ぐと星又しても戰地の話になる　高知　加藤白水境

青葉が吹かれて揺れて日の暮れてこの子等疎開するとて蜻蛉とぶ寺の木青葉　廣島　門藤康生

病む妻にラジオの聲を低くしてゐる雨　奈良　竹長場風

毛蟲よ春は木のうへにある雲　長野　栗田千可志

としより十藥乾してゐて土用入の暑さつづき　東京　鈴木水帆

山からくる風田草取りの笠がうごいてゐる　東京　鈴木水帆

老いてこの頃もつ鍬豆畑の豆の花　東京　鈴木水帆

燈臺の灯に家の灯に空に星がある　岐阜　間宮折鶴子

暮れると風が白い花行水してゐる　高知　加藤白水境

流れで鎌といでゐる山がまろく明けてゐる　高知　加藤白水境

露のまんまの野菊を挿す病ひよろしく　東京　都々城二丁子

朝草になつて行くのが見える窓で輕い體操　東京　都々城二丁子

砂利とる機械の音がやむと鮮人小舍の向日葵ひるになる　東京　龍川安彦

青田のポツンと停車場がある送電線の入道雲　東京　龍川安彦

お裁縫いたしますと書いてあるその家夕顔咲いてゐる　平壤　山田幸雄

今日の暑さが物干竿にかかつてゐる　平壤　山田幸雄

青葉して木のそれぞれの個性窓　廣島　門藤康生

灯を消して涼しい街のあれは鐵をにる火　廣島　門藤康生

牛の一歩一歩の日ざかり　奈良　竹長場風

歸還してほうれん草の青さで多

濠北派遣　新村和也

雨のあと枯木の下の水たまりがうつしてゐる

風が樹にそのまま日暮れる　宮城療　加藤黛杉子

子供お祭り紙のラッパがよう吹けます

青葉さわさわ守衛さん扉あける　宮城療　土屋曙子

疎開の子土地の子兵隊ごっこ暑い山々

傷兵に疎開の子が遊びにきてへうたん涼しい　宮城療　渡邊草子

バスの終點になつてゐて誰もゐない青田の一軒

マスクをとつてものをいふ看護婦さんとけさの朝顔　大阪　宇野喬子

パチパチ麥藁風呂にくべてゐるこほろぎ鳴いてゐる　大阪　梁瀬阿羅與

獸禱終り朝の青桐かすかにゆれる　駐滿洲　眞野義武

枝の空の青いばかりな歩哨　和歌山　御井弓弦

奉仕隊歸つてからの靜かな仕事場暑さくれどき　岐阜・鈴木綾子

ところてんありますす前も横も麥熟れてゐる　横濱　近藤眞佐夫

ひぐらし雨が日暮れる平熱の體溫計　京都　坂本春一

早りの田圃の、電信棹まつすぐ　姫路　古城白鷺

葉つぱも花も食へるといふ南瓜の蔓うちの軒　福岡　下田麥

山の茂りやうよ兵となつて歸つてきた　長野　八重田保朗

蠶かご洗つてゐる栗の花はさかり　島根　戸島小春秋

泥の手から今植ゑなさいといふ苗貰つてゐる　千葉　長谷川情泉

いなづまする青田蛙はないてゐる　駐〇〇　池田里邑

飛行機の影を落してゆく大地のまろさにて夏　福井　大角幸

風鈴ぢつとしてゐる蚊がくるそんな生活　東京　印南一可

暮れかかる空へ雲の流れる音がする　神戸　高柳登一

古い街道白い埃部隊炎天行軍　開城　松村龍雲

褌をおいて汲んでゐる赤い下衣で堤の草で　大阪　勝醜句男

暑い踏切りが降りてゐる按摩さん杖　駐南方　砂川鳳凰木

この兵を部下として佛想華さく霧をゆく　長野　川久保天狼

蜂がひさしへぶつかつて炎天へ去んだ

兵庫　田中秀夫

草に干したふとんいれて草の匂ひ夕日

廣島　野北菊江

ぞんぶん降つてはれて朝こんなにふとつてゐるあんどう

東京　河田惠美子

庭の大きな南瓜にもさよならを云ひ疎開してゆく

福井　北岡きよ子

旗に名をかく靜かにて一りんざし

大阪　藤原豐

雨が蓮の香りがする夜學から戻る

大阪　皿谷小夜子

窓の日脚が歸る時刻となつて梧桐實になつてゐる

尼崎　廣橋清志

ひよこをひよこがぴよぴよ追ふ蕗の葉に風

神奈川療　中西國友

どしやぶりの音をきいて夏夜ゐる

濠北派遣　よし人

雨がふる樹があると樹の下にゐる兵

釜山　辻尹子

明け方雨ふり敵機すでに遁走せりと報道

岐阜　肥田案山子

よく脫げる靴の子を抱いて花菜の徑

埼玉　瀧澤流木

桐の葉しづくしてゐるひぐらし

駐滿洲　市川滿哉

かささぎ低く日暮れるや警報解除

奈良療　佟谷正勝

お濠の水の青いのも内地の春である白衣である

駐〇〇　中野治輩

風に赤旗と白旗とあごひもにて立つ

京都　高橋又兵衛

女子挺身隊隊伍朝は校門の朝顏

石川　米脇淳

せまい畑にしてきうり曲つてゐる

豐橋　大鹽白々

氷屋があつて氷かく青木の下馬をつないである

東京　德島猛夫

蜘蛛の巢に蜘蛛がゐて雁來紅朝

福井　川端愁草

鈴懸の葉の風その窓へ呼んでゐる

千葉　加藤秋黑

夕立のあとの濡れた牛車がかたがた通る

川崎　深澤營城

蝶を追つてその子の足音流れてゐる川

山口　大中青塔子

防空壕にゐる子等と南瓜のたくましい蔓と

千葉　深山きよ

もやのなかのカンナの色から暑くなりゆく

京城　廣保麥穗

夜あけの風が青々と雨あがつてゐる電信棒

津　水野田々詩

巢立つばかりのつばくらへひでりの空から親がくる

陸集

卍禪子選

そのみどり葉つよく光る朝竹の根するどき　大阪　森谷乙山

霽れ明るし子供四人のあたま堤草々のつゞきて

山曇る日の晝寢草ふかきを忘れ

花の色は赤けれど窓きはの器物つめたくみどり

きのふけふ河原に來て石投げあそびくらしつ

池に音なしなんばの葉日々にのびかさみゆく　山形　會田保男

飛機音近し莵麻の實を摘む

盆が來た、上筵の手がはずんでゐる

飛機に成れと臭氣を忘れ讀んぬき

蟲の羽音微か、誘蛾燈の青き光輪

雁の實が成つた、征きし兄の面影

獨り居ても便りと居れば月たのし

秋の鼈義兄のお便り讀んでもみる　横濱　佐藤鳴風子

汗のシャツ干して一合の米を磨ぐはだか

月夜の防火水あけるに蟲が蟲呼ぶ

あはれなる人のこめかみの指が追ふ晝の蚊

海は土用波高くあげて夕暮となる蜩

蚊がよろけて蚊取線香の煙がまつすぐにあめ　三重　河合英巒居

大山れんげ花の香に立つ夕去りてゐる

風呂を出て大山れんげ花の白く

梅青くて自轉車の籠の欲しかつた

大樹青楓すかすその枝を君の踏まへゐる

文珠蘭が咲く大の鉢誰レかかけしまゝ　花巻　照井稗人

炎天、亜炭の山の坑道ひえびえカンテラ灯つてゐる

眞夏が空の明るさと山を映してゐる湖

炎天茨の花へ風が光つて

はや月出でて實のある木のまつたく夏

花から小川へ炎天のてふてふ　東京　小川一灯

七夕の夜空となり秩父晴れわたり

凌霄花庭にこぼれてゐるを雨宿の藁屋で

斜面の病舍幾だんにも蜩日盛りを鳴き

青葉木蒐小田の月が夜ごと滿ちてくるよ　久留米　高取芳春

南瓜の雄花雌花の窓であつい高粱の飯

南瓜の葉かげ涼しく靜臥の時間

驕敵殺戮せずば再起再起だ雲の峰

油手がギターを彈いて睡蓮暮れかかり　スマトラ　西垣碧禪洞

今日一日の汗手紙一本かき終へたローソク

星が涼しいやうなドラムカンの湯にけふも浴す

この無事の第一報が海を越えて來與でみる

兵舍は川の水の色が光りここに蟲がなく

福岡　南畝三坡

むかし十五で元服少年警察官小供小供した夏帽
八十二歳の大臣あり二番ダリヤ盛りさかる
汐灼け一皮むけ二皮の黒ミ秋深みゆく

名古屋　鈴木梅宇人

青桐の花散つてゐる蟻は幹を上るあり
雲の下花のなくなりて仕事にいそがし
山羊の乳重々しく岸の草ひたり流れ

上海　坂爪竿々

何かどよめいて霧の中の大きい日輪
埃を浮かべそれがめぐるだけの畫の池
ひけ時の風に吹かれてみるくらい花屋の花

岩手　佐藤吟雨

化學へのメスの多空晴れてゐる窓
御靈安かれと葉櫻の雨降つてゐる
體操朝の練成が夏山

花巻　大森古天

單軌線緑蔭に入つた
片蔭の出來て往診車かな
向日葵はまはりみどり兒よく睡り

東京　飯島郁歩

つぎつぎ出征の旗に名を書く汗の作業衣
炎天の雲白く流れてゐる機械うごいてゐる
暮れると涼しい風のベルトの音
疎開する日の近い子たちに街が夕燒

北方派　御厨南天紅

草の香に青さに白衣脫ぐ朝です
皇天へ虹立てて春の海がくれてゆくに白い帆
世界地圖日々見なほすに盛んな蟬時雨

東京　渡邊如闘

雷撃必殺の冴え見せ夏草すれすれに愛機着く
無事に還つて來た愛機へ皆はしる夏草なびき
初陣の爆音たからかに雲の峰裏へ祈る
合歡木の花のそよぐを吾が肩ほどの母と歩るく

福岡　福永友一

いつか雀ら緑へ消えて工員ら歸る
造船工歸る海の端にぎらぎら夕燒
月が浮いて來た芝生の冷に句帳を置く

三重　川津一之

白鉢巻に土運ぶ夏の學童汗拭ぐはない
天地の防人にさくら咲くさくらちる
靜かなりしづかなる夜の青葉木蔦
ねむの花咲いた川面にもさいた

山形　海谷新二

さるすべり咲く決戰信念燃ゆるがに
庭は畑茄子の胡瓜のいまさかりなる
働くぞともさあ決戰虹を仰ぎ行く

大阪　濱松久野仙雨

汗のシャツ裸身で風鈴のそばにつるす
潜水艦みゆ海鳥飛魚のとぶみゆ
同じ繪團扇あの三人が長生きした

吉更

大いなる山なみ北に晴れ今日の出立　横濱　櫛田東谷

まなこやさしく牛立ちをりいちめんの草　花巻　佐藤大峯

風の月夜木賊のひよろながい影　群馬　佐藤厚吉

雜木嫩葉やさしきかもつゝじなどかくし　東京　吉沼晴穗

すみれすみれ山が高くなつて濃紫　東京　渡邊まき子

森に參拜征く身は淨いもの　横濱　田代濱女生

希望を月にさゝやくなれた小道　東京　奥村そのえ

葉をむしりむしり希望夏雲を追ふ　岩手　白藤旅人

涼しさ庭から呼ばれ青空が夕となる　岩手　高橋長太郎

海の歸りらしい顏々電車松林を拔けてく　岩手　加賀谷昭吾

若鷲血と燃えて夕陽空をうづめ　岩手　小笠原一郎

警報若き命なれば血はたぎりにたぎり　岩手　小笠原一郎

ひとりぼつちミシンの音が夜空にとゞろきさう　岩手　小笠原一郎

色づいた柿あらはにふつてしまつた　岩手　高橋長太郎

つとめて笑つて病んでゐる　岩手　加賀谷昭吾

月夜の影となり歩いてくる　岩手　加賀谷昭吾

秋の日が山の端にかかり一日ある島　横濱　櫛田東谷

裏の木が裸になつた母からの荷物　花巻　佐藤大峯

栗も茸もすつかりぬれて谷の水音　群馬　佐藤厚吉

梅雨この頃の涼しい朝々を李の花　東京　吉沼晴穗

二冊の本も白衣に日あたつてゐる　盛岡　細越榮

月夜の白い道が家の門まで　東京　奥村そのえ

踏切を貨物列車が通つた小學生歸つてゆく　東京　奥村そのえ

遠山なみくつきりとほこりおさへの雨過ぎ　福岡　牛尾紀代子

夜濯すます光芒の交叉しづかに空を移り　福岡　牛尾紀代子

あちこちの森からの喇叭よく揃ひ涼しい月夜　福岡　牛尾紀代子

幼頃の夏雲の形句座の鹽豆かむ　福岡　池田房代

けがれなき朝顏の色よ母も出て來る　福岡　池田房代

急救袋肩にして滅敵と燃ゆるカンナの道　福岡　池田房代

蟋蟀釣おどけるも居て松の廣い園　三重　若林石玲

釣竿の祖父を迎へる子が柳秋を灯し　三重　若林石玲

もんぺさん海軍さん勝つ國民へ涼風　三重　若林石玲

疾走するトラックに白鷺の白が、この鄉　三重　田中靜波

水田そよいで白鷺が飛ぶ飛ぶす暮れて暮れる　三重　田中靜波

明日挺身隊に立つ子女の日曉した顏　三重　田中靜波

顔、顔、顔、粥を食ふ夕餉涼風　三重　伊木祥園

汗は汗に流れて夜もなく血の通ふハンマ　三重　高島梧朗

警報職場へのペタル道のみ白く白く星　青森　鎌田露山

照りつづくに一と杓の水一株の苗も植ゑる氣持　東京　高田千代子

われ増産一株へ生還期せず子は征く　東京　大熊敏治

父母のまもりの幾歳や子の天飄ける　東京　清水千惠子

苺うれそむ段石垣ゆ遊ぶ子みゆ　神奈川　佐渡清一

夕虹線路のもろこしの葉がゆれてゐる　東京　吉池良子

讀み疲れあさぎ色の空アンテナが高い　東京　大熊敏治

うら寂し疎開する子等の集ひ遊ぶ　東京　清水千惠子

奉仕の車押す手に銃持つ日思ふ　東京　清水千惠子

母も子も絆のモンペで爆音聞いてゐる　東京　清水千惠子

洗濯物良く乾く遠い空の白い雲　神奈川　佐渡清一

兒の鼓動高し蟬の音竿に近づく　東京　吉池良子

川風に草が搖れ汗の作業終へたり　東京　吉池良子

よくしなふ小枝で雜木林の木の芽　東京　吉池良子

春は自らの草萌え雜木にも　花卷　谷地畝志郷

夜業終へて點檢、少し熱くてある車軸　三重　伊木祥園

霽れて夕陽の國見山へ國見堂が白い壁　浦和　西牧言人

ごう音、と合圖する手のむなしいちめんの夏空　三重　高島梧朗

簾の外兵隊さんぱんく直る間の煙草の火　伊丹　秋吉秀一郎

潮の香に久潤かたる涼しい月の葉ずれ　青森　鎌田露山

詩のことども夏の夜更けて汽笛はるかの海に　福岡　淺野ミツ子

雨宿りの子等ふえて來て梧桐の葉がほたり　福岡　田代重豐

池の向ふに灯が二つ蛙の聲太くなる　福岡　田代重豐

國護る銅像へそぞろに蚊る夕蟬　福岡　峰松春風

遠山の姿も清ら雷雨からりとあがり　福岡　峰松春風

鳥屋の鷄が起きてゐて涼しい月の高くなつた　山形　渡邊舒生

無花果熟れて夜話する日の多くなりて　山形　渡邊舒生

ふたゝびお召にあづかりて　東京　中村倉次

態田をなびき風つよく召を受けた胸へ　東京　中村倉次

玉碎の意氣で學徒の肌の光　東京　牧野雅堂

警備終つて仰ぐ朝陽の輝かしさ　東京　牧野雅堂

交替して大きく呼吸する朝の空氣　東京　牧山蟬聲

東京　林　東雲

勤勞終り入日が山なみをぼかす

東京　新田耕治

池に足浸す弟の疎開近づき夏

東京　竹内草堂

徹宵警備終つて蟬の聲を聞く

東京　武林鶴嶺

池の芙蓉の水玉朝の光にころがる

えんどうが朝の光に透通つて青い

東京　古賀謙二郎

蟬の聲に警報の夜明が來る

東京　加古賀星

青葉陰日の斑點に蟻がうごめく

浦和　千葉大帆

その子三つになり勳記の前にしづかつむりを下げ

浦和　會田明

戰果あがる南瓜いよいよふくらみ蔓といふ蔓に

浦和　戸島三更

太陽大らかに疎開學童の列の濃い影

浦和　中村竹雨

戰ふかぎりこの地踏みしめて立つ千年の松

浦和　立花しげり

待避訓練忍草や母子草壕にちらばり

浦和　木本梵天

青蔦の窓寫眞修正の男こちらをちらと

浦和　戸田まゆみ

電車來るたび煽られ廢止の驛の穗草

浦和　戸田みゆき

蟬時雨ミシンの音と交響す學校工場

浦和　田中加六

花屋花屑落してゆく鋪道の朝の陽

浦和　佐藤無角

ばくおんそれから花いちじくの日々の空

浦和　澤村日迎

撃ち墜せこの鋲この螺旋（ねぢ）機械が暑く唸る

福岡　加來筑川

飛べば飛ぶ鷗らの一面のちぎれ雲

福岡　丸濱誠坊

兵も部隊長も月見草に腰卸す薄月

福岡　川谷岩男

逝く夏を惜しむ蛙か簇生の池の睡蓮

陸風集

一宮　伴野龍

白い雲もりあがり動かない綠の地平

炎天馨つるまくしあげ土の肌を耕す

水汲み出して壕の口陽にあてておく

一喜一憂せずトマトまあかい一きれ

〇〇隊　木下弾

期して夏ぞらゆるやかな流れに

豐年を呼べば星々ちりばむる　　大阪　大槻　實

眞夏ひかりつつ空透く編隊　　東京　衣浦　眞

月光にサイパンのあたりの雲と星　　高田　清水　豐

營庭砂塵に霞み眞裸の男の子等　　横須賀　高橋　棟

斬刀訓練吾が腕力これつぱかりか熱風を斬る　　熊本　園木六食子

油負けの手見せる吾子勤勞女學生　　福島　濱名　白香

南瓜花々家ぬちここ出征守る　　東京　衣浦　眞

葉ゆれよし瓢花點々癒ゆかにイちて　　大阪　大槻　實

語りつくさね灯いろ出で黃金蟲つく（Kを送る）　　高田　清水　豐

峽中の材木驛紙屑籠の底のやうに　　横須賀　高橋　棟

汽車は水系を離れても驛の鐵骨だけが　　熊本　園木六食子

梅雨風には平凡な日本アルプスようぬ等　　福島　濱名　白香

善光寺の闇を滑つて通る英靈祭の歸り　　東京　衣浦　眞

流せく石の影この渦に浮くもの皆小さし　　大阪　大槻　實

代田點々日焦げの隊は植ゑ移る　　高田　清水　豐

月の野火もかくし防衛の確かなる村　　横須賀　高橋　棟

夏の朝學童は草履ぬぎ揃えたり　　熊本　園木六食子

枯萱の光る徑隊列を迫つて行く　　福島　濱名　白香

星空寄田風男野の路馬を還しに　　東京　衣浦　眞

瑞穗の國の秋の走り穗見えてわれら征く　　大阪　大槻　實

炎天汗と闘ふ銃後を讀へては征く　　高田　清水　豐

馬鈴薯の山征きに征く赤紙　　山形　すずきゆきひと

野の陽よぬかほ探る道ぼこりのなか　　横須賀　高橋　棟

出穗期の作男とし眦ゆくに手をふり　　熊本　園木六食子

夕燒につゝまれ出穗期の作男の笑ひ大きい　　福島　濱名　白香

村人お盆休みのズボンに穗風吹きつゝ　　東京　江島　雨畑

ボンボン船の音なき梅雨ヱ浦干汐　　大阪　大槻　實

松とあかるき通詞し道俤にあり　　高田　清水　豐

知多夕月は茶つぎ茶のみぬ手ぶさたに　　横須賀　高橋　棟

ケケロ鳴きぬるを思ひ夜に更く計を肯ぜず　　熊本　園木六食子

夕空うけて峽をかへるさ遲田田植見ゆ　　高岡　森　掬葉

今日しも暮れんとする日輪のあまりに靜かな悲しみ（サイパン）　　諏訪　今井　默天

烈しき陽の下に散りし勇士らなれその陽をろがむ　　いま國生みまつりごとみ田に引く水

夜風重たく星をかくし明日からの覺悟がある　　なぐれかもめがふなばたのどよもだち

かけつゝ声荻こゑのその夜にも　　田征　赤星　竹峰

かぜほうほう火とぼしの山祭見ば　　この山へこの島へ別れる澪をみつめる

地に下り立つ砂が身動ぎもしない　　闘志鑑へ象ねる船足のゆるさ

けふも海原つゞく雲のハンモック

指針を記す（二）。

中塚一碧樓

加々美青河

げんげ田の畦堅しゆくべくして歩く

一句の持つ強さに打たれる。「ゆくべくして」といふやうな思ひと其言葉遣ひは幾分堅い感じであつて、句としては中々に言ひ難い所であつて動ともすると固まり過ぎる事になるのであるが、此場合、「げんげ田の畦」といふ情景によつて、句を硬化する事なしに表はし得てゐる。のみならず一句の確かなる強さを示し得て、却て句に力を持つてゐるのである。

「べくして」と云ふやうな思ひ方は俳句としては不可であらうとか、「べくして」といふやうな言葉遣ひは俳句としては不適當であるとか、一概にさう定めてかゝらうとする事は不賛成である。嘗て「俳句用語」を順序よく羅列した一册の書物を見た事があつたが、それは作句人にとつて多少の參考になるといふ事はあつても、大體、之は俳句用語であるといふ風に定めてかゝらうとするのが既に誤つてゐると思へるのである。「べくして」といふやうな種類の言葉は無論その書物の中には無かつたであらうと思ふのであるが、僕たちは其時の句心に適ふ言葉であれば、どんな言葉でも構はずに句の言葉として用ひ得ると思ふのである。

俳句の思ひと云ふものは此邊の所までゝあらうとか、俳句の用語はこの範圍くらゐであらうとか、兎角に俳句といふものを狹く野線圍ひにしようとする事あるは大いに不服である、先人未踏の地へ踏み込む事があつてこそいゝのであり、生々潑々の新しい言葉遣ひが力を持つ事がいゝのであるまいか。

と云つても、我儘勝手な思ひでよろしいとか我儘勝手な言葉遣ひで構はないといふ意味では決してない、一句の思ひを練り澄ます事、一句の言葉を選み精げる事に最も愼重でなくてはならないのは論を俟たない所である。之は前述の俳句の野線圍ひを厭ふ心持とは全然別の問題である。

大橋鏡作

陽は昇りぬ馬鈴薯の花ゆるゝ新工場

供木の切株靜かなる豆蒔きて

新工場の句、丁度に近時の風景であるのみならず、一句清新の感じを持つてゐる。殊に「馬鈴薯の花ゆるゝ」の「ゆるゝ」は如何にも生き〳〵として一句の勢を得てゐる。又「陽は昇りぬ」とこゝで打切つてゐるのも此句の心に恰もいゝ强い調子といふべきであらう。

豆蒔きての句の處しい心持には大いに牽きつけられる。「靜かなる」とその心持を直ぐにそのまゝに句の表へ出してはゐるのであるが、この「靜かなる」は少しも浮いてはゐないやうである。句末の「蒔きて」も素直にやさしい言ひ方であつて中々の味はひであり、一句に作者の

澄んだ心境を觀る可きである。

いつまでも夕日の麥の穗にある道　井手逸郎

いかにも地味である此確かさに贊成する。この樣に押へてものを云つてあると却て一句の心持がよくひゞいて、句心が身に應へて來る。此場合の「いつまでも」は實によく言へてをり、作者の思ひがそつくりそのまゝに出てゐる。殊更でなく、まことに平易な日常の言葉で云つてゐるところも佳いと思ふ。

麥の穗立ちのしん〳〵とした靜まり、夕日はいつまでも〳〵廣々と照りつゞけて、そこには又靜かなる一すぢの道がずつと向ふへ通じてゐるのである。僕にはこの一すぢの道も亦いつまでも〳〵在る事に相違ないなどと思へる。

此作者と僕とは故里を同じうしてゐるが、僕は此一句を見て直ぐに故里備中の野道を感じて實に懷しい感にうたれたのであつた。

ぺん〳〵草おとろへず土くろき土　林鷲水城

優にやさしい情である。「ぺん〳〵草おとろへず」と云つてゐる事は、そのぺん〳〵草のおとろへる、おとろへないと、そのおとろへる事について作者の持つてゐる感懷である。ぺん〳〵草をいかにも本氣で、ひたぶるに觀てゐる作者のやさしさがよく表現されてゐる。而もその情が流れ去る事なしに、しつくりと感じられるのは句末の「土くろき土」といふ確かなるおもひ、確かなる表現に據つてゐると思へる。「…おとろへず土くろき」とのみ云つても、「……おとろへずくろき土」と云つても一通りは判るのであるが、それでは作者の此時の心持の張りが拔けてしまふのである。幾分調子づくやうではあるが、やはり此句の通り「土くろき土」と重く表現すべきであらう。

ふるさとの雪のあるまゝの春の山　加賀谷灰人

ふるさとを親しむ心持がはつきりと出てゐて快い一句である。「雪のあるまゝの山」の「まゝの」といふ思ひは實によく、又鮮かに作者の心持を表はし得てゐると思へる。たゞ句末の「春の山」といふ云ひ方が、恰も所謂季題のやうに云ひ置かれてあると感じられるのは、嘗て定型の句を試みてゐた僕達にのみ感じられる所であらうか、僕には或るもの足りなさを感ぜしめる。その山が春である事には無論贊成なのであるが、たゞその表現法が一つの型を思はしめる所を些か殘念に思ふのである。

物量の中に入る氣持麥畑にもそふて歩く(應徵)　竜田眞魚

新鮮、而もじつくりと「……そふて歩く」と慥かに、押へて言つてゐるところ一句の重さを持つてゐる。「物量の中に入る氣持」とは誠につか〳〵とよく云へたものだと感嘆させられる。この心は青年の心であり、この言葉は青年の生きた言葉であつて、ぢかに迫つて來る力を持つてゐる。之は入門の人々に話して置きたいと同時に老巧の同人達にもよく觀て貰ひたいと思はれるのである。

開目鈔（入門俳話）（二）

荻原井泉水

日のながいさかりの雀水のむと行くところがあつて飛んでいく　鈴木折嶺

一ぴきの雀でも、一羽のてふてふでも、夫を本當に書くといふことは難しい。寫生といふことが安易に說かれてゐるが、正しい意味の寫生とは、生を寫すこと、生命を寫すこと、少くとも夫が生きてゐるやうに描かれたものでなくてはならない。だが、大抵の所謂寫生の句は、死んだもの、形だけのものに終つてゐる。さうした句の多い中に、此の「日のながいさかりの雀」の句は、此の雀がいき〳〵とはばたいて、自分の飛びたいやうに飛んでゐる。それは、言葉がリズムをもつてゐるからである。然し、言葉に出すより前に、其物に先づ、好く好く目をとめて見ることが肝腎だ、頭の中で見てしまはないで、兒童が目をみはつて自然の一草一木を見るやうに、新鮮な感覺をもつて見ることだ、さうして其物と自分とが氣持の中で一つにとけこむことが肝腎だ。つまり、作者が其雀になりきることだ。それでこそ、本統に生きた句が出來るのである。此句の「行くところがあつて……」、これで作者が其雀になりきつてゐる。

少女胸に小犬ついてゆく小犬夏のあさ、橋　井上充夫

はつらつとした句である。氣持の若々しい句である。さうして手法が大さう新鮮である。「少女胸に小犬……」とは洋裝の胸のブローチの小犬である。胸の小犬と、ついてゆく小犬と並べて面白く作つたのではない。行きずりに見えた少女のかうした姿態——いかにも少女らしく、無邪氣で、しかもさつさうとして、こゝろもち胸をはつて、足音立てて歩いてゆくやうな——その瞬間に感じたほゝゑましさから、しぜんに印象づけられたものが「胸に小犬ついてゆく小犬」なのである。「夏の朝」、これもしぜんに感じられる。さうして、その全體を統べて之を「橋」の上に取り上げたところに、此句の觀照と表現の新しさがある。此の「橋」は取つてきて附けたやうなものではない。又、此の風景の一部としての「橋」でもない。たとへば——

橋を少女胸に小犬ついてゆく小犬夏の朝

と云つた風の句の仕立ならば、橋が風景の一部であつて、夏の朝が調和風の季節感になり、在來いくらも出てゐる感覺になる。それと此句とのリズムの相違を味ふべし。コンマの用途は一樣ではないが「……夏の朝、橋」と表現した此の手法はユニックなものである。

夏の花は朝は朝日をうけて咲く　原頼子

生命の純粹なる表現——といふ語は、不熟かもしれぬが、さう云ひ

たいやうな、いかにも生命感の好く出てゐる句である、その生命感を何かに托して、若くは何かを通して表現しないで、そつくりと純粋に取り出して表現したといふ句である。此の花は、蓮であるか、睡蓮であるか、朝顔であるか、木槿であるか、作者はその物の形から來る其名よりも、夏にさく花としての其花の、生命を取り出したかつたのである。「朝は朝日をうけて咲く」も次に朝日とあれば重複ではないかと思はれようが、決して重複ではない。朝には朝日を受け……夕べには夕日を受ける、此の自然法爾のありがたさ、隨緣は隨順するところに、生命は花さくのである。此の氣持をしかも、一つの宗教的の概念としてゞなく、或刹那の詩的の感銘として、内在的の表現を求めたところがよろしい。字數は五七五の定型とさして變りはないが、内在律は内在律であるといふ一つの解りやすき例でもある。内在律は、單なる不定型ではない。定型の人は、我々の句をたゞ十七字に作らないこと、卽ち不定型を理念としてゐるのだと解し、舊自由律の作家でもそのやうに考へてゐる人もあるやに思はれるので附言する。

パン屑のこぼれる膝すこし句を作る氣持になる　加藤裸秋

秋の夜とか初冬らしい日ざしとか、を表現した方が句としてしつくりしようと考へる人もあらう。さう考へる人は、此句の中に既にさういふ季節感をかぎ出してゐるのだから、それならば其季節を書かずとも、書いてあるに等しいとも云へよう。だが、俳句は季節を離れては無いものである、とは云へない。俳句の持ち味といふものは、その言葉とリズムを通して、一つのふんゐきをかもし出すところにある。季節を感じさせるのもその一つである。氣分を感じさせるのもその一つである。氣韻を感じさせるのも……人品を感じさせるのも……まだいくらもあらう。此の「パン屑」の句は、第一に病後の人を感じさせる。米飯はまだ食へないので、パンを食べてゐる。その食ひこぼれを拂ふのも少しものうい位。それでも又、句を作らうかといふ位の元氣は取りもどしてゐる、さういふ氣分である。こゝに一個の青年俳人の氣質がある。それから、作者、裸秋を知つてゐる者には、裸秋の風貌も出てゐるのだが、それだけは一般の人の鑑賞には期待し難い。

祇園さまの夜はほほづき賣るうちのほほづきは蟲くふてゐる　森久樹男

ずいぶん長い句である。層雲の句には大正の末期（凡そ二十年前）に非常に短い句が流行し、これを短律とも云つた。その反動でもないが、七八年前から大さう長い句が流行して、これを長律などと云ふ人も出たが、今日では、短律、長律といふやうに特色づけることではなく、たゞありやうのまま、あるべきままに作ることを理念としてゐる。此の「祇園さまの夜」の句はずいぶん長いけれども、長たらしくてたるむとか、しまりがない、とか云ふ風の感じは少しも受けない。それは表現が律的に整理されてゐて、言葉の配置が有効にカッチリと組合はされてゐる爲に、其の一つ一つの言葉が引力を以てはたらいてゐる

からである。

風があつて、風のない日なたの木のかげ　井手逸郎

層雲の句にコンマを使つた句のあるのは、印刷上の記號ではない、内容的の一つの表現である。それは、呼吸の息づき（ポーズ）であることもあり、抑揚（アクセンチュエーション）であることもあり、濃淡（ニュアンス）であることもある。だが、此の「風があつて」の句は、逸郎君自身が用ふる言葉の「撓ひ」の一種であつて、いはゞ大さう強い撓ひなのである。風の寒い日、路傍の木が風に搖れてゐる、お風があるなと思ひながら歩いてゆく、と、何かのかげにあると見えて、そこだけは風の無い日なたの木が、いかにも暖かさうな影をもつて立つてゐる。さういふ印象である。風があればこそ、此の「風の無い日なた」が日なたとしても暖く、此の「かげ」はいかにも其木の自ら足りてゐるやうな生命のかげとしても感じられる。全體が「風があつて」でいきくとして動き、「風のない日」で靜かに落着いてゐるのである。

句評

奥村四紘人、南晴星、西東八十八

茹でてさらに青うなりしよもぎを干したり　樹裏人）

【四紘人】道具建の極めて少ない、すらりとした姿が内容をよく活かしてゐる。茂吉氏の言を借りるならば正に實想觀入、「茹でてさらに青うなりし」に藝道とか武道とかいふ道に於ける陶冶に相通ずる「にじみ」を感じる。一面戰時下の生活斷面のにほひもして好きな作である。然しこの作は別としてやゝもすると斯うした作風は單なる文章の一節に終り易い。

【晴星】複雜な句が多い中で斯ういふ單純な輕い驚きを盛つた句もいゝ。慾を言へば背景、雰圍氣といつたものが少しあると更にいゝと思ふ。この句は砂糖水のやうな味で稍〻單純過ぎてゐる。

【八十八】愛色淡彩。「さらに青う」の哀感「たり」に生動。芭蕉が「青くても有べき物を唐がらし」と。「茹でて」に於て今日の句である。

地が起伏砲聲へつゞく菜の花　（日出男）

【四紘人】如何にも千葉邊の春光が廣々と展開され國防の響が今なほ耳朶を打つ。表現上「へ」は大いに效果であつた。

【晴星】大きな句であり格の高い句である。つはものゝこゝろであり一軍を率ゐる武將のこゝろでもあらう。この「つゞく」は詩情の昂りが感ぜられる。演習の情景であらうが前線と變りない心地である。ゆとりのある悠揚迫らぬ大きな感じに打たれる。ずつと水準を拔いた佳句である。

【八十八】「砂たてゝ落つる敵の彈はげし麥田をかいて土もりて伏す（北支）天田臭一」「地が」のが最も疑問。また「つゞく菜の花」のつゞくが動いてはゐないか。せめて「菜の花や月は東に日は西に」プラス「砲聲」は如何。

工女ら飲む湯をくみて廊下に雪のふきこみ　（武　夫）

【四紘人】この廊下は渡廊下の様に思はれる。增產にいそしむ工女等の敢闘精神の躍如たるものを感じる。

【晴星】工場によく溶けこんで生れた句であらう。情景實に生き〳〵してゐる。工女らの動作までよく眼前に彷彿する。「雪のふきこみ」で切つたところもいゝ。清新な氣もちに誘はれる。

【八十八】「節季行さむき雪の編笠　曾良」「出かゝりて茶の湯の客を誘ヒ合　石菊」律速に於て「ふきこみ」のこみが緩い。「降りかゝる吹雪はらひつゝ湯茶を注ぐ國防婦人の手は凍て赤く見ゆ（北支の驛頭にて）早川進一」

穗麥のはろか日の丸が銃聲とだえた塹壕　（夜　舟）

【四紘人】激戰直後の雰圍氣がよく出てゐて良い。「が」の体止には作者の複雜な感情が盛られてゐると思ふ。兎に角、第一線に居て句をまとめるといふ餘裕綽々さは、其の作品の可否を論ぜず、日本軍人の膽の太さがおのづから露呈されてうれしい。

「とだへ」は「とだえ」が正。

【晴星】前線の句だけに眞劍な氣分があつていゝ。「銃聲とだえた塹壕」は實にいゝ表現であるが「日の丸が」は問題である。出さない方が却つて情趣を躍動させるものがある。こゝは我等とか兵らとか言つた氣もちだと思ふ。日の丸はこの句と別に今一句を爲すべきである。尙作者には日の丸でいゝが讀者には「日の丸の旗」と略せずにいふ方がいゝ。

【八十八】「昨日占めし城壁の上の日の丸を　涙にじめる眼に仰ぎたり（徐州進擊）鈴木清太郎」日の丸を仰いで日本臣民たる者誰か感激せざるものがあらうか。たとへ「穗麥のはろか」が、どうあらうとも。

山の櫻が咲けばといふこのへん屋根のせきれい　（井　夢）

【四紘人】詩外樓君の話をそのまゝ取入れ春の山を想起せしめ。水邊に多く見る鶺鴒が屋根に來てぴんぴんと尾をはねて居るのをとらへて清流池畔の近きを寫し、句の幅を十分持たした味、「咲けば」といふ「ふくみ」もいい。「屋根の」を「に」にしては如何。

【晴星】友の閑居のあたりの樣子がよく出てゐる。渾然たる一句の情趣はいゝ。山近い住居で高からぬ家が一かたまり、そのへん小川の河原もあるかと思はれる。話す友の姿も出てゐる。「このへん屋根のせきれい」が前半に對しよく利いてゐて何となく老手を思はせる作である。

【八十八】「このへんは」詩外樓氏疎開の地、但馬といふ。「屋根のせきれい」に作者の旅愁がある。芭蕉に「うらやましうき世の北の山ざくら」と。山ののゝ、よろし。

若葉ゆさぶる樹上の子等に日がある　（六　合）

【四紘人】子等の喚が歌が葉ずれに和してきこえて來る。若葉から現はれてゐる幾つかの天眞爛漫のふくよかな顏には、初夏の日が射つけて、此の皇土をやがて擔ふべき第二の國民の潑剌さがぴちぴちと躍動してゐる。

【晴星】斯ういふ句は一筋にすつと通つた味を感じ得なければ失敗である。この句わからぬことはないが良い味が出る迄に至らないのは「子等に日がある」の措辭が不明瞭な感じであり「若葉ゆさぶる」も適切でない。一句今一段の突込みが欲しいと思ふ。序ながら氣魄の籠つた句が全般的に少ないのは時局柄遺憾である。

【八十八】可般圖第十三番右「ゆら〳〵と蛙ゆらるゝ柳哉　北鯤」左「手をかけて柳にのぼる蛙哉　一齊」「日がある」以上に子らの歡喜躍動の姿を求む。坪田讓治作小說「三太と善平」參照。

各家近什

四日市　原　鈴華

一機でも多くハンマー振りハンマーに答へてゐる
警報ひびく戰ひぞ眉きりりと夫人
捷つて捷つて涙滂沱の日あれ皆働
こゝろ必勝苦戰とも日輪あふぐ海のべ
遺書したため奉公袋に入れる月の明くて滿月

兵庫　山田宗作

いづかたも澄む朝を胡瓜の畠の中
天爽涼の野の雲一すぢ速し
花あるつゆくさがうごかない朝
百日紅花咲くもと吾子ら地に立つ
夏既に草は穗となりし青き川岸

秋田　大越吾亦紅

人の親しむ夏山の姥杉へ行くみち
雨のあとから日が照つて行く波のくだける
月にぬれて露の屋根、から雫する
驛に巢燕の子改札されて出て行く
汽車の進行じつと蟬なき聞けてをるがよく

東京　米倉勇美

青草黑ずみ灼熱のサイパンあり玉碎
地に祈るよし來れ敵われらみ民
防人の朝立ち陽の輝き野の輝き
應召の旗子に送られ南瓜の花眞つ盛り
鮎光り去り陽の中の親子で日暮るゝ

東京　九眞十中花

つづいて甫圃前進する夏草の地面
蜻蛉とぶ行進する分隊手を高く振り
壕を掘り水にぬれたとまと食ふ人々
七夕竹立つあちらこちら一面青い田
征く人あり刈草干しひろげてある道端

東京　山本蒼天

夕べ灯が入り走つてる汽車で山峽となる
ひぐらしが鳴くお寺のここにも學童疎開一隊
うすべらな雜誌を手にしラシヤーの夏の夕べ
滿月の遠い山も近い山も宿の此邊水音
宿から見えて寺の蓮池の花風少しある

大阪　長屋青橙

船を造る材木を浮かし入江夏海
錨鎖といふ一連の嵩ありて炎天
水を飲む人々の裸身砂に船蟲走る
艦隊決戰を念じ夜々胸に汗いづる殘暑
棒の實點々日々われら決戰に構へる

石巻　佐藤露江

日盛り日まわり雲の上爆音通る
おなじ型の計畫造船土用波寄せてゐる
夏の海とわたしが鏡の中ちよきちよき床屋さん
山かげのびてきてうちの中涼しい時計と鏡
村を一目の墓山春にして父を埋めまつる

茨城　渡部嫁ケ君

越後顎城の畦豆花咲いて黒い黒い稻

草を踏みてゆくに摘みすてし山百合の花を踏む

工員工女ひけてしまひたる驛の竹煮草咲き

べこ五疋礫原を渡り川柳をたべに來る中洲

杉新芽垂る蔓物の觸手伸べたる

神戸　窪田耕兒

寸土も耕して茄子や南瓜や家に日を入れてゐる

茄子のたしかなる枝ぶり、花、軒先ちよつとはけ

さつと一雨來さうなどこかのきりぎりす啼く啼きつづける

管制して星の美しいその下の隣同志で

猫の仔木にのぼつたり暑さもどうやらほつとした夕方

名古屋　加々美青河

胡麻畠ぬれて花白し我にけふある

幸をおもふ消えず星の火ありて蚊帳に寢る

こどもらよ風吹けば動く青い草穗のこゝに

子を連れて靈顏のひるともなりて妻は

茄子に水をやる我を空を雲移り

長野原　蝦煎子

山のあわいに時きをえて山青い蕎麥ばたにする

月が山から出てきて湖があかるくてお盆

森の上に晴れた月火の見があかるい道を來た道

家のうらから甘藷畠直路あさあさ朝露ある

家あつてコスモス、コスモス咲いて道が湖はたに出る

下關　兼崎地橙孫

曆買ふて書き足す海の大戰果（ギルバート沖）

鹿兒島　遠矢瀉丘

石蕗をむく匂ひに暮るゝ夫婦ッきり

船團出てゆく灣門水泳の子等

弦月のぼるあたり機音しきりにもとむ

名月の脚下防空壕暗し（警報解除）

何かこう枕でも肩にさわつてゐないと眠れない短夜

京都　財馬呵歩

長女俊子病む

細工燈籠に風が來る昨日の蝶が今日も來る

日に日に痩せる娘のそばに月が毎晩明るうなる

底ぬけ降つた南瓜のつる

蝶々よ草があつて花があつて蝶々よ

二羽來て電線五羽來て炎天

兵庫　蓬萊鷺郎

鬪魂畦の薊を薙ぐ牛を追ひ上げ

沖の方も船なく梅雨浪たちて流るゝ

こゝろ島に通ふ島近く明けし短夜

兵らみな泳ぐ鐵橋高くかゝる淀み

夜北吹く吹く暗い床几にておもふ完勝

大阪　木戸夢郎

境内末社あちこち向いて青葉おそい木も若葉する

丹波の山を向うにここから海も見えてからつゆ

六月大祓

夏越しの風に切麻が散る入日嚴然

昨日が今日となり明日となる青田に青田

半夏生の旱が川原の橋脚

但馬　池田詩外樓

十二時、ちしやと蠶豆と竹の子と煮けた鍋おろすところ
灯がもれてゐて起きてゐるいへのそとのよる
ゆでた二度藷に鹽添えて盆に、午後三時といふ蠅がゐる
井戸に釣瓶が、手を登つてしまつた蔓で
しやくやくが芽を、土に壺が伏せてあるのでしづかな

京都　風間榮治郎

のう〳〵牛鳴く親しさ豌豆が咲く
征く君が軍裝けふの夏ぐも
勝たう夏雲へすゝむ木銃學徒の列
全員戰死その日明らかな夏の山ひざ

山形　和田光利

まどのそとわらび山にしてわらんぢつくつてゐる
山のものせをふて一本橋を渡りくるむすめらしくて
わたしのまどでかぼちやいういうとふとつてゆく
血の垂るる鱒さげて藤の花に日がつよくなつてきた
こんな山なかで蟹を掘つてゐるはは子

秋田　池田亜杜子

天夏雲一多き銃を擔ひ
だれもみなお召待ちてありし芦茂り
つゆ明けの濱さやうな人々
人代々夏朝のお宮

茨城　藤崎麥村

山中湖畔錬成行五句

月が出てつきのひかりかほへくるので山國
道はどこからみても富士の湖べ秋さいてゐる
ふいてみて郭公笛ゐはがきだけ買ふ
つきよから防空サイレンが日本の富士のつきよ
富士を見ながら富士に登つてきた話あさ

福岡　加藤迷々可

サイパンの同胞に寄す

一億は機を待てるのみ同胞よ七生を期さむ
おん身等死所を得たるこの血殘る限り皇土は
磯べはろかへあまた大東亜負ふ身きたへてゐる
泳ぐ眞似ごとしてたそがれの汽船の煙
星が明るくて待避の子の言葉きいてやる

東京　福島一思

子供に夏休みが來た子供に雛草の花
灯取蟲わが軀に來る燈下一卓
梧桐に夏の風ふく向ふ家の白い壁
だまつて夏夜の岸近く來て釣する男

大阪　中原我樂

お盆十三夜の潮遠鳴りひゞき
お盆十四日十五日空に雲なし
盆燈籠ゆらぐ燈籠に影さして笹の葉
猛夏車窓にこともなく吹かせ黒髪

弘前　柳田流矢

新聞の隅の國民座右銘などもけさは涼しい
暑くならぬ内に何かと井戸から汲んでゐる
灯を暗らくしてこのあたり蕗の葉の月夜
そこにあるもの枕にして遠いかみなり
松の蟬ながいことないてゐる面會人の包みもの

信濃　小林滿亘斗

夏朝山が晴れてゐるこゝに水車がめぐり

朝露あり草刈るは山の一つの斜面

こども草を刈りいこふに吹くかぜ

學童青草の束を背に一れつ林の中を

浦和　山木六合

夏の夜半ばくをんひきもきらず深い子達のねむり

水栓の虹を飲み疎開の棟木片付けてゐる

音せぬやう子の音させてまゝごとの青いほほづき

家族みな疎開してこほろぎ身近に來る

鎌倉　井出台水

猫かようねる胡瓜日やけてに蔭

爲萬龜子刀自

古稀のお祝供出の諸山蓬萊

悼山梨將軍

今は何もみいくさもつりぼりもなし

青山齋場

來るも來るも久濶のむれほうけやう

サイパンの報をきく

蚊やりの末を眺めてくれてゆく

大阪　風神竹千

病床吟

肺を病みて杉葉の雨明るしよ

バラの鉢を並べ起きるやうになり

槻の葉のかはり病氣もたのしい

妻も働くときであり風かをる

伊豫　白石花厭史

強敵をもち簾垂らしてゐる御飯いたゞく

一雨くる南伊豫の山の甘藷蔓さしに

山が見え南瓜のみがついてみがいつてまろぶ

代に手を入れる水がかりは山の池から

富山　高橋良太郎

岩代信濃を旅す

暮れなづむ驚はしろし首のべてあるくにて

桐のにほひであるさいてゐた見てとほりもどり

長野高いところも花に御堂安茂里どのへん

からたち花しろし看護婦試驗場

春はさざなみする潟のさきの海のしらなみ

秋田　淺利小鍵

春いよゝたけ思ふまゝひく水もてあます

郭公鳴くこのやう空氣たのしい日

さまよふごとき蕗の葉の小蟲愛すべし

飛び去りてゆく鳥の聲ひゞく夏の日

福岡　木村綠平

旅は燕も雨のふる日はぬれてゐ

諫早にて

この邊豆の花どの家も石垣月夜

ひるはうどん屋へうどん屋藤咲いてゐる

大村にて

よべのつづきである雨があさふつてゐる青桐

同

尋ねてくるハガキ日南に蠅があそんでゐる

浮子、沼につづく田の蛙沼に聞こえる　名古屋　池原魚眠洞

運河六月船と空重油のやうな水の曇り

毎晩同じ刻の同じ星梅雨に入つて梅雨がふらない

遠いサイレンはたしかに警報にまだよしきり

ともだちどもが眼をむく蛇を竹の先きにしてゆく

杏の實地にころがれり涼しふる郷　東京　宮林釜村

杉林涼しい土親牛仔牛風吹く

蓮の葉そよぐ八月の大底入を覗ふ

裸身黄な花は黄な花で咲くところ

雷雨霽れ行くところ送り火清淨　兵庫　井手逸郎

おまつり木深いところにこども來てゐる

苗の植はつたところの空がくれようとしてゐる

朝は日のさし青田へさしわたり朝の日

家のよこいちじくの木水流れてはやし

草生へしげつてゐるまの夕立ひと雨のあつた畑　大連　水上太古堂

朝の草をふみ畑に紫の茄子の實

暑かつた一日この街に見えてゐてはつきり青い山

汐騒ぎ岩の海鵜のひたすらなる動き

炎天山林深く山に風の音

日盛り家にゐて母の傍にゐて女の兒　八幡　飯尾青城子

花が葉になる雨、檢微鏡のぞいてゐる

干潟の舟も、やむことなしにふる雨夏

わら家征く旗へんぽん、一本の水平線ま多　近江　若林乙吉

山から丸太を落すきほひ谷芽ぐみて廣し

煙突の煙が上る空地あれば瓜を植ゑて

雪の降り足らぬを話し話し行く偶々我手雪を握りて

松陰先生の碑を少し離れて拜し椎の實を拾ひ

谷に水音すれば廻り道もする彼岸の中日　岩手　加賀谷灰人

空のひろさをあるいてゐる

家の雀の朝早くつれだつこゑ

椎の嫩葉の雀つれそろつてきてゐる

日日咲く木蓮の花の空となりぬ

海へ朝をあゆむ牛　下關　近木黎々火

毎晩月が通つて暗くて木

道が夜へ坂をおりきつて夜を

木の雨の町がいま暗くなる

海のある小さなベッド、生れてゐる

夜が芽ぶくめをあけてあかごである　東京　南晴星

鐵骨ふとく通る事務室鐵兜まろく置かれ夏日

青無花果の高さ垣を隣へみちつけし庭

兵と、し見送る兵舍前木の蔭多き夏朝

入隊一隊が出來晴雄ずんく營庭へ入りゆく夏朝

朝食の家族らにぐつと高くなつた庭の玉蜀黍畠

□南方だより

西垣碧禪洞

起床の鐘の音と共に床をけつて濃霧深い陣地を前に朝のすがゝしい大氣に接します。

そして演習、點呼!!

後方のジヤングルには猿やリスが、そして可愛い小鳥達が朝の挨拶に餘念がありません、そぞろ吹く風に一日の鋭氣を養ひつゝ朝會です。

朝食後亦演習です、米英軍の總攻撃に備へて、これを撃滅するには先づ戰技の向上です、如何に兵士達が志氣旺盛にして忠君愛國の精神に燃えて居ても其の技術に於ておとつて居れば勝利を得る事は出來ません。

夫故我等が全兵力の威力を完全に發揮する事の出來る迄不斷の練磨が大切です、故に我等は毎日々々戰技向上に物凄い程の演習に懸命です。

燃える太陽は演習に懸命の自分達の頭上より何んのようしやも無く照り付け汗と油にまみれ乍ら唯敵機撃滅の一途に前進して居ります。

そして晝食、そして少休です。

南方に於ては一日の中少しく最も暑い時體を休めないと長く生活できないさうです、其の意味で休息を致します、此の時間に於て演習の疲れを休め次の演習、作業の鋭氣を養ひます、時にはほんのうとうとした位の午睡ではあるが樂しい內地の夢を見る事もあります、又兵士達は碁や將棋に一刻を過します、又他の兵は樂しい內地の出來事を思ひ浮べてゐるのが微笑して夢みる兵士もあります。

そして午後、又しても始めの鐘の音と共に飛び起き演習です、戰には限度がありません、それと共に其の技能にも制限がありません、唯勝つ迄は〳〵と敵米英撃滅の炎を燃し突撃です。

午後〇時演習終了。

それからが一日の內一番樂しい時です、一日の演習にくた〳〵に成つた體をドラム罐の野天風呂で一日の汗を流し、すが〳〵しい氣持で夕食の出來るのを今やおそしと待つて居ります、腹ペコ〳〵の現在エビの天ぷらや燒きめしは如何に量が多くても完全にたいらげてしまひます。

バナナやパインアプルの果物も如何にと驚く程たひらげて平氣です。

日中の長い南方では午後の八時頃にならないと夕闇は迫つて來ません。赤い太陽が遠い彼方のジヤングルに沒せんとする時一人附近の現地人の家を訪問するのも樂しみです、次第に馴れて來た現地人も片言まじりで日本語でおせじをならべて歡迎してくれます。

太陽が沒し附近が薄暗くなつてそぞろ吹く風が椰子の小枝をゆすり靜かに頰を撫ぜ去つて行く風、ホタルが一ツ二ツ飛び名も解らぬ蟲がなくこの風景は內地の六七月頃の風景とそつくりです。

夕闇の散歩も氣の向くまゝに我等がアタップの屋根の兵舍に歸る。

物凄いイナヅマ、雷の來襲、闇の天地が二ツにわれた樣なイナヅマ。

スコールです、ボタリ〳〵と大粒の雨が來る、そして前のジヤング

ルに物凄い雨の音がする、そして走り〳〵やつて來る。

この樣に毎夜の如く南方特有のスコールに見舞はれ乍ら一日の疲れた身體を休め乍ら懷しい內地の皆樣に便りを書き又想像しつゝ夜の一刻を過します、亦ビンボンに熱中〇〇時頃迄も遊ぶ事もあります。

さつきのスコールは何處へ行つたかあとかたも無くからりと晴れた大空には銀の星がさん〳〵として輝き、南十字の星が明日も快晴を約束するかの如くまたゝいて居ります。

明日も亦元氣で南方第一線の防備に、任務の完璧を期する覺悟で眠りに入る、これが自分の一日の生活です。

多忙の中にも亦樂しい一日、一日。我等が此の愛國心の前必ず榮冠來らん、共々に最後の勝利迄頑張りませう。

□昭南より

中田紅甫

……雨季明けの灼熱のもと日々將兵と共に働き續けて居ります。働くといふことほど健康法は無之、黑く石の如く固まり、もう現地人との見界もつきかねる程であります。

晝の暑さに引換へて夕となれば急に水銀の棒も二十二度位に下り南洋特有の巨大な滿月の下や或夜は南十字星の下に椰子の木蔭から螢の明滅が見えたり、數知れぬ樣々の蟲の音が降るやうに聞えて來ます。尤も之等は年柄年中通じての現象であります。

私が手飼の手長猿は檻から出して以來、野生に戻つてしまひましたが、矢張り庭から逃げても行かず、百尺程もあるテンブスの枝の上で朝々ホーホーと食物を求めます。

昨夜、昭南俳句會の第三回句會を拙居に開きました、次第に同人が多くなつて行く事を喜んでをります。

×

今、ドリアンの季節です、(年二回出來るのです)それで巷はその人糞のやうな臭い氣で一ぱいです。果物の王ださうですがなか〳〵グロです、マングスチンは美味です、ランブタン、パインナップル、今は街中が果物だらけです。年中有るとは云ふものゝ、その中でも殊に大量に出來る時が矢張シュンであります。

句蓆

□高輪藻川追悼句會(大阪)

逝くに後前途上花白い　泰山木　椋溪
誰にも逢はず逝つた天地の眞夏　葉三郎
ひろき蚊帳に寢し追憶こゝに近き浪音　鷲郎
親しく大阪辯で夏の夜瓦斯の灯が明滅したりした　至水
涼しく人らがをり聲なき人ら　秋風嶺
念々朝の野の明り夏河流れ　宗作
卒然吾に歸つて南瓜の花のおほろかさ　無名草
山野夏さ中編隊こゝろこめて見る　榮治郎
おもと鉢に泥はね上げて雷雨靜まる　智一郎
けふを大念佛來るに風立ち青すゝきさあを

あなたの空間がある夏の事務室　流介
今佛のみ殘り梅雨らしさない日　柏葉
逝きし日入道雲はつきりと見えし此窓　龍河
工員と並んで送る柩車麥秋の陽をうけて　延太郎
あるじなき机に向日葵の花さしてある　尊傳十郎
夏空に星一つ散りて咲く忘れな草　輌繪亮
花賣既に呼ばれて明易い門口　南海城
きいろい蝶々が飛んで來て夏草のたけてしまふて　豆翁
山の苦匂ふ深さ僕も犬も知る深さ　芦川
氷切る大鋸を詠んだりして　青橙
庭に茄子を作る隣人靡あげて裏より來る　橘榮
夜々に星のまばらに草の匂ひ　姫百合
はつ多一つ硯ありこれを慈しみ石のすこしゆるめる　かつ子
じつと耐へる桃の葉ずれ聞いて居る　我樂
眞夏地の底から湧きいづる水

□陸上野句會

防火用水あふれるまでに星が涼しく靜まり　四絃人
水仙活け端坐す少年航空兵　鈴華
牛の曳く疎開の荷が火叩はゆれてゐる　雀背
夏の山頂どつかり足踏んばり平野見おろす　白市
過ぎし日のスペインの影古塔草にむし　一路
よく寢なかつた赤ん坊が寢てゐる朝の驟雨　南舟
夕べ征く家の小旗丸くもさされ日を受けて　卍禪子

□層雲東京句會（八月十三日）

すずしいうちに來て床屋の、ひとりはゐる白い木槿　井泉水
蓬のへり鳳仙花はぢけたりして訓練終り　秋紅蓼

庭一面畑にして芍藥は咲かせておく　青天
翌はけふよりも、夜食後の汗をふく　周央
警戒警報が鳴る芋の葉露をおいてゐる　巴水樓
八の日朝早く勤人防空服裝かぼちやの花　八洲雄
蟬のなく木の下が乾いてゐる土　淳一
無糖紅茶の味と新聞の幾日分と旅を戻りてゐる　云水
久々病むことも今年ひでりの西瓜のたね　浩二
お祭りの月が橘のたもとの松の木　一歩
癒えてかぼちやの花風に吹かれる　流一
仕事から歸る道が日暮れのお茶の水電車通り　健治
疎開してひろい炎天トタンが積んである　不二雄
夏がいつしん木をゆさぶつて木から出た星　正子
警報の滿月が更けてゆくやねやね　望子
則にも花をさし夏日々好日　靈南
夏みかんは枝においても非常米は袋の中にある　逸子
靜かな夜の探照燈とその下の木と秋がすずしい　清一
暑さも夕べは隣に疎開の荷がついてゐる蟬　鳴雨
全軍戰死ときけば月もない夏の夜星もない　白毫子
草を刈る競爭草の中の富士　香樹
かつこうかつこう事務所まへ青田見通し　草土史
魚とる子供らはだか稻の穗が出て　蕗郷
暑い日も漸くひぐらし鳴く挺身隊少女　信夫
くれかけてたけやぶ青いにはとり白い　勇
梅雨晴れの店の奥の椅子で對談してゐる　星童
ゆだちのあとの棕梠が雫する醫院の窓あけてある　砂吐流
　　俊二

句輯

喜谷六花

實梅量りて八升あと土間に拾ふこぼれ
晝顏水に水草を押し伏せた咲きざま
三たび長沙を略す野山麥が熟れた我らに
國ぶりこの俳句あり僧が咏む茄子の花
壕に掩蓋する鋸も二挺あり青桐下蔭
家が盆が來るたゝずまひ合歡の花なごり
壕掘る草履重たく濕りたり咲きて螢草

秋山秋紅蓼

水に月さす國生みの昔よりの葦の葉
この大なる夏を戰ひぬく氷噛めば香す
青紫蘇二三本は植ゑ戰時食君とゐる
國難二千六百有餘年來の大暑であり
桔梗咲きはじめしあさ基地からの便りも
兄と弟と征つたこの夏の南瓜咲いてる
工場から戻つてくるをすずしくしておく

林雀背

夕飯まつてゐて子夕飯にゐない蟬が鳴いてゐる
疎開がきまり子と飯たべる夕の爆音山に消え
二階から隣の菜園見おろし數へられるトマト
紙屑つい放るのだつた二階から見える煙突のけむり
朝顏咲きけふも配給ものとりにいつてくれるとしより
どちら見ても青田の青田吹くかぜの戰捷
捷ついくさの日日を咲く家の夾竹桃の花

細谷不句

水の中草少し立ち雲やはらかい
麥畑の方から家の井戸へ來燕
蠅叩くわがそば晝寢してる大きい兒
夏朝行人みな耳がある家々の煙突
麥稈帽かむり一つの耳小さい人
先生大先生しんさつ終りあふぐ扇子
大きい輕い箱を提げたわれら一本道夏晝

内島北琅

瓜畑の眞裸のばく音
傘におつる雨の音の青梅
をさなく豫科練の歌がうたへて青梅
ことしはとしよりばかり白い夏まゆ
土から諧が出る山からのしら雲
蟬時雨つちのわが仕事陶房にはいる
陶工まはだか南瓜一つ大きな

朝倉九鵬子

隣組防空壕六句

嚴さびモンペ女ら壕の修祓
祝かしこみたこむら立ち鍬を入る

鵜嘴振ふわれら夜蠟火は猛し
おうなをみなもヤンレこの力兒も呑もち
軍都少女が朝夜の手すけ壕ざらへ
突貫壕へ背兒し母々日もと鍬うち

渡邊砂吐流

山まゆの蛾はわれに黄いろゆふべ
次男疎開す、三句

一人を學童疎開にやり家に蚊帳つる
垣の外を連れてゆく子供ぬかごの垣外
どこまでもがやがやとゆくだらう軍窓秋立つを

內田南艸

水に早春の空が竹藪が伏見を山崎へ道
松山に春陽がなだるところ錦帶橋、を流れてくる川
一望青田端然と富士早朝壯丁檢査へ行く
きんまんと水を張り月へ梯子渡して置く
踏切番屋根に遠しい南瓜決戰輸送上下頻繁
もろこしの葉づれの重爆編隊がゆく夕燒
山へ來て暑い一日が夕べ山の端にある雲

奥村四紘人

お神輿わつしよい鉢卷裸が日にもむわつしよい
白衣に皆立つやがてちらりと驛の向日葵
女子挺身隊さつさうと雲の峰海へ崩れ
じやがいもころころ土を出るすめぐにの日のみひかりに
南瓜日ましに重うなる我いのち思うても見ぬ
豫北の便りもて來る鍬立てて汗の手に
防空服裝枕邊に晝のよな月へ掛ける

妹尾美雄

南瓜が二つだけ生りわが爲すこと朝夕
團扇に就きても思ふわが知れる何某飛曹
風のないさうした晩に子供とをる甲蟲來る

竹千迫悼

君の齡の冷やかな死よ花をまつる
炎天鳩が飛んでじれつたい
闘病遂に事切れし君に明け易い

同

君の齡の冷やかな死よ花をまつる
炎天鳩が飛んでじれつたい
闘病遂に事切れし君に明け易い
ひぐらし厨から刃物の音が聞える
蔓麻の實黒ずみ線路ばた犬が通る
妻は荷を揃へ疎開する子に秋立つ
君が征つてから野を見る癖がついた

伊東俊二

新聞をよんでから夏朝白い紙がある机

狛江村に草土史を訪ねる

暮れても土に牛がゐる勤人は驛からもどる
夕べ淨水場へ道の青草流れてゐる水
その道よりも近道の蛙がないてゐる
防空壕があり南瓜が咲いてをり奥さんお勝手
トマト畑にはあるトマトコップの水
繪描きの庭として向日葵の花夕日になる

浮子、沼につづく田の蛙沼に聞こえる　名古屋　池原魚眠洞

運河六月船と空重油のやうな水の曇り

毎晩同じ刻の同じ星梅雨に入つて梅雨がふらない

遠いサイレンはたしかに警報だにまだよしきり

ともだちどもが眼をむく蛇を竹の先きにしてゆく　東京　宮林釜村

杏の實地にころがれり涼しふる郷

杉林涼しい土親牛仔牛風吹く

蓮の葉そよぐ八月の大底入を覗ふ

裸身黄な花は黄な花で咲くところ

雷雨霽れ行くところ送り火清淨　兵庫　井手逸郎

おまつり木深いところにこども來てゐる

苗の植はつたところの空がくれようとしてゐる

朝は日のさし青田へさしわたり朝の日

家のよこいちじくの木水流れてはやし

草生へしげつてゐるまの夕立ひと雨のあつた畑　大連　水上太古堂

朝の草をふみ畑に紫の茄子の實

暑かつた一日この街に見えてゐてはつきり青い山

汐騒ぎ岩の海鵜のひたすらなる動き

炎天山林深く山に風の音

日盛り家にゐて母の傍にゐて女の兒　八幡　飯尾青城子

花が葉になる雨、檢微鏡のぞいてゐる

干潟の舟も、やむことなしにふる雨夏

わら家征く旗へんぽん、一本の水平線ま多　近江　若林乙吉

山から丸太を落すきほひ谷芽ぐみて廣し

煙突の煙が上る空地あれば瓜を植ゑて

雪の降り足らぬを話し話し行く偶々我手雪を握りて

松陰先生の碑を少し離れて拜し椎の實を拾ひ

谷に水音すれば廻り道もする彼岸の中日　岩手　加賀谷灰人

空のひろさをあるいてゐる

家の雀の朝早くつれだつこゑ

椎の嫩葉の雀つれそろつてきてゐる

日日咲く木蓮の花の空となりぬ

海へ朝をあゆむ牛　下關　近木黎々火

毎晩月が通つて暗くて木

道が夜へ坂をおりきつて夜を

木の雨の町がいま暗くなる

海のある小さなベッド、生れてゐる

夜が芽ぶくめをあけてあかごである　東京　南晴星

鐵骨ふとく通る事務室鐵兜まろく置かれ夏日

青無花果の高さ垣を隣へみちつけし庭

兵と、し見送る兵舍前木の蔭多き夏朝

入隊一隊が出來晴雄ずんく營庭へ入りゆく夏朝

朝食の家族らにぐつと高くなつた庭の玉蜀黍畠

□南方だより

西垣碧禪洞

起床の鐘の音と共に床をけって濃霧深い陣地を前に朝のすが〳〵しい大氣に接します。

そして演習、點呼!!

後方のジャングルには猿やリスが、そして可愛い小鳥達が朝の挨拶に餘念がありません、そぞろ吹く風に一日の鋭氣を養ひつゝ朝會です。

朝食後亦演習です、米英軍の總攻撃に備へて、これを撃滅するには先づ戰技の向上です、如何に兵士達が志氣旺盛にして忠君愛國の精神に燃えて居ても其の技術に於ておとつて居れば勝利を得る事は出來ません。

夫故我等が全兵力の威力を完全に發揮する事の出來る迄不斷の練磨が大切です、故に我等は毎日々々戰技向上に物凄い程の演習に懸命です。

燃える太陽は演習に懸命の自分達の頭上より何んのようしやも無く照り付け汗と油にまみれ乍ら唯敵機撃滅の一途に前進して居ります。

そして晝食、そして少休です。

南方に於ては一日の中少しく最も暑い時體を休めないと長く生活できないさうです、其の意味で休息を致します、此の時間に於て演習の疲れを休め次の演習、作業の鋭氣を養ひます、時にはほんのうとうととした位の午睡ではあるが樂しい內地の夢を見る事もあります 又兵士達は碁や將棋に一刻を過します、又他の兵は樂しい內地の出來事を思ひ浮べてゐるのが微笑して夢みる兵士もあります。

そして午後、又しても始めの鐘の音と共に飛び起き演習です、戰には限度がありません、それと共に其の技能にも制限がありません、唯勝つ迄は〳〵と敵米英撃滅の炎を燃し突撃です。

午後〇時演習終了。

それからが一日の內一番樂しい時です、一日の演習にくた〳〵に成つた體をドラム罐の野天風呂で一日の汗を流し、すが〳〵しい氣持で夕食の出來るのを今やおそしと待つて居ります、腹ぺこ〳〵の現在エビの天ぷらや燒きめしは如何に量が多くても完全にたいらげてしまひます。

バナナやパインアプルの果物も如何にと驚く程たひらげて平氣です。

日中の長い南方では午後の八時頃にならないと夕闇は迫つて來ません。赤い太陽が遠い彼方のジャングルに沒せんとする時一人附近の現地人の家を訪問するのも樂しみです、次第に馴れて來た現地人も片言まじりで日本語でおせじをならべて歡迎してくれます。

太陽が沒し附近が薄暗くなつてそぞろ吹く風が椰子の小枝をゆすり靜かに頰を撫ぜ去つて行く風、ホタルが一ツ二ツ飛び名も解らぬ蟲がなくこの風景は內地の六七月頃の風景とそつくりです。

夕闇の散歩も氣の向くまゝに我等がアタップの屋根の兵舍に歸る。

物凄いイナヅマ、雷の來襲、闇の天地が二ツにわれた樣なイナヅマ。

スコールです、ポタリ〳〵と大粒の雨が來る、そして前のジャング

ルに物凄い雨の音がする、そして走り〳〵やつて來る。

この樣に毎夜の如く南方特有のスコールに見舞はれ乍ら一日の疲れた身體を休め乍ら懷しい內地の皆樣に便りを書き又想像しつゝ夜の一刻を過します、亦ビンボンに熱中〇〇時頃迄も遊ぶ事もあります。

さつきのスコールは何處へ行つたかあとかたも無くからりと晴れた大空には銀の星がさん〳〵として輝き、南十字の星が明日も快晴を約束するかの如くまたゝいて居ります。

明日も亦元氣で南方第一線の防備に、任務の完璧を期する覺悟で眠りに入る、これが自分の一日の生活です。

多忙の中にも亦樂しい一日、一日。我等が此の愛國心の前必ず榮冠來らん、共々に最後の勝利迄頑張りませう。

□昭南より

中田紅甫

……雨季明けの灼熱のもと日々將兵と共に働き續けて居ります。働くといふことほど健康法は無之、黑く石の如く固まり、もう現地人との見界もつきかねる程であります。

晝の暑さに引換へて夕となれば急に水銀の棒も二十二度位に下り南洋特有の巨大な滿月の下や或夜は南十字星の下に椰子の木蔭から螢の明滅が見えたり、數知れぬ樣々の蟲の音が降るやうに聞えて來ます。尤も之等は年柄年中通じての現象であります。

私が手飼の手長猿は檻から出して以來、野生に戻つてしまひましたが、矢張り庭から逃げても行かず、百尺程もあるテンプスの枝の上で朝々ホーホーと食物を求めます。

昨夜、昭南俳句會の第三回句會を拙居に開きました、次第に同人が多くなつて行く事を喜んでをります。

×

今、ドリアンの季節です、(年二回出來るのです)それで巷はその人糞のやうな臭い氣で一ぱいです。果物の王ださうですがなか〳〵グロです、マングスチンは美味です、ランプタン、パインナップル、今は街中が果物だらけです。年中有るとは云ふものゝ、その中でも殊に大量に出來る時が矢張シュンであります。

句蓆

□高輪藻川追悼句會(大阪)

逝くに後前途上花白い　泰山木　椋溪
誰にも逢はず逝つた天地の眞夏　葉三郎
ひろき蚊帳に寢し追憶こゝに近き浪音　鶯郎
親しく大阪辯で夏の夜瓦斯の灯が明滅したりした　至水
涼しく人らがをり聲なき人ら　秋風嶺
念々朝の野の明り夏河流れ　宗作
卒然吾に歸つて南瓜の花のおほろかさ　無名草
山野夏さ中編隊こゝろこめて見る　榮治郎
おもと鉢に泥はね上げて雷雨靜まる　智一郎
けふを大念佛來るに風立ち青すゝきさあを

あなたの空間がある夏の事務室　流介
今佛のみ殘り梅雨らしさない日　柏葉
逝きし日入道雲はつきりと見えし此窓　龍河
工員と並んで送る柩車麥秋の陽をうけて　延太郎
あるじなき机に向日葵の花さしてある　尊傳十郎
夏空に星一つ散りて咲く忘れな草　鞆繪亮
花賣既に呼ばれて明易い門口　南海城
きいろい蝶々が飛んで來て夏草のたけてしまふて　豆翁
山の苔匂ふ深さ僕も犬も知る深さ　青橙
氷切る大鋸を詠んだりして　芦川
庭に茄子を作る隣人聲あげて裏より來る　橘榮
夜々に星のまばらに草の匂ひ　かつ子
はつ多一つ硯ありこれを慈しみ石のすこしゆるめる　我樂
じつと耐へる桃の葉ずれ聞いて居る
眞夏地の底から湧きいづる水

□陸上野句會

防火用水あふれるまでに星が涼しく靜まり　四絃人
水仙活け端坐す少年航空兵　鈴華
牛の曳く疎開の荷が火叩はゆれてゐる　雀背
夏の山頂どつかり足踏んばり平野見おろす　白市
過ぎし日のスペインの影古塔草にむし　一路
よく寢なかつた赤ん坊が寢てゐる朝の驟雨　南艸
夕べ征く家の小旗丸くもされ日を受けて　卍禪子

□層雲東京句會（八月十三日）

すずしいうちに來て床屋の、ひとりはゐる白い木槿　井泉水
籬のべり鳳仙花はぢけたりして訓練終り　秋紅蓼
庭一面畑にして芍藥は咲かせておく　青天
翌はけふよりも夜食後の汗をふく　周央
警戒警報が鳴る芋の葉露をおいてゐる　巴水樓
八の日朝早く勤人防空服裝かぼちやの花　八洲雄
蟬のなく木の下が乾いてゐる土　淳一
無糖紅茶の味と新聞の幾日分と旅を戻りてゐる　云水
久々病むことも今年ひでりの西瓜のたね　浩二
お祭りの月が橋のたもとの松の木　一歩
癒えてかぼちやの花風に吹かれる　流一
仕事から歸る道が日暮れのお茶の水電車通り　健治
疎開してひろい炎天トタンが積んである　不二雄
夏がいつしん木をゆさぶつて木から出た星　正子
姫百合今朝さいて庭も畠の隅に高く　望子
警報の滿月が更けてゆくやねやね　靈南
聞にも花をさし夏日々好日　逸子
夏みかんは枝において非常米は袋の中にある　清一
靜かな夜の探照燈とその下の木と秋がすずしい　鳴雨
暑さも夕べは隣に疎開の荷がついてゐる酸　白毫子
全軍戰死ときけば月もない夏の夜星もない　香樹
草を刈る競爭草の中の富士　草土史
かつこうかつこう事務所まへ青田見通し　蕗郷
魚とる子供らはだか稻の穗が出て　信夫
暑い日も漸くひぐらし鳴く挺身隊少女　勇星
くれかけてたけやぶ青いにはとり白い　童
梅雨晴れの店の奥の椅子で對談してゐる　砂吐流
ゆだちのあとの棕梠が雫する醫院の窓あけてある　俊二

句輯

喜谷六花

實梅量りて八升あと土間に拾ふこぼれ
晝顏水に水草を押し伏せた咲きざま
三たび長沙を略す野山麥が熟れた我らに
國ぶりこの俳句あり僧が咏む茄子の花
壕に掩蓋する鋸も二挺あり青桐下蔭
家が盆が來るたゝずまひ合歡の花なごり
壕掘る草履重たく濕りたり咲きて螢草

秋山秋紅蓼

水に月さす國生みの昔よりの葦の葉
この大なる夏を戰ひぬく氷噛めば香す
青紫蘇二三本は植ゑ戰時食君とゐる
國難二千六百有餘年來の大暑であり
桔梗咲きはじめしあさ基地からの便りも
兄と弟と征つたこの夏の南瓜咲いてゐる
工場から戻つてくるをすずしくしておく

林雀背

夕飯まつてゐて子夕飯にゐない蟬が鳴いてゐる
疎開がきまり子と飯たべる夕の爆音山に消え
二階から隣の菜園見おろし數へられるトマト
紙屑つい放るのだつた二階から見える煙突のけむり
朝顏咲きけふも配給ものとりにいつてくれるとしより
どちら見ても青田の青田吹くかぜの戰捷
捷ついくさの日日を咲く家の夾竹桃の花

細谷不句

水の中草少し立ち雲やはらかい
麥畑の方から家の井戸へ來燕
蟲叩くわがそば晝寢してる大きい兒
夏朝行人みな耳がある家々の煙突
麥稈帽かむり一つの耳小さい人
先生大先生しんさつ終りあふぐ扇子
大きい輕い箱を提げたわれら一本道夏晝

内島北琅

瓜畑の眞裸のばく音
傘におつる雨の音の青梅
をさなく豫科練の歌がうたへて青梅
ことし、はとしよりばかり白い夏まゆ
土から、讀が出る山からのしら雲
蟬時雨つちのわが仕事陶房にはいる
陶工まはだか南瓜ごつ大きな

朝倉九鵬子

隣組防空壕六句

嚴さびモンペ女ら壕の修祓
祝かしこみたこむら立ち鍬を入る

鶏嘴振ふわれら夜蟻火は猛し
おうなをみなもヤンレこの力兒も呑もち
軍都少女が朝夜の手すけ壕ざらへ
突貫壕へ背兒し母々日もと鍬うち

渡邊砂吐流

山まゆの蛾はわれに黄いろゆふべ

次男疎開す、三

一人を學童疎開にやり家に蚊帳つる
垣の外を連れてゆく子供ぬかごの垣外
どこまでもがやがやとゆくだらう車窓秋立つを

內田南艸

水に早春の空が竹藪が伏見を山崎へ道
松山に春陽がなだるるところ錦帶橋、を流れてくる川
一望青田端然と富士早朝壯丁檢査へ行く
まんまんと水を張り月へ梯子渡して置く
踏切番屋根に遠しい南瓜決戰輸送上下頻繁
もろこしの葉づれの重爆編隊がゆく夕燒
山へ來て暑い一日が夕べ山の端にある雲

奥村四紘人

お神輿わつしよい鉢卷裸が日にもむわつしよい
白衣に皆立つやがてちらりと驛の向日葵
女子挺身隊さつさうと雲の峰海へ崩れ
じやがいもころころ土を出るすめぐにの日のみひかりに
南瓜日ましに重うなる我いのち思うても見ぬ
濠北の便りもて來る鍬立てて汗の手に
防空服裝枕邊に晝のよな月へ掛ける

妹尾美雄

南瓜が二つだけ生りわが爲すこと朝夕
團扇に就きても思ふわが知れる何某飛曹
風のないさうした晩に子供とをる甲蟲來る

竹千迫悼

闘病遂に事切れし君に明け易い

同

君の齢の冷やかな死よ花をまつる
炎天鳩が飛んでじれつたい
ひぐらし厨から刃物の音が聞える
蔥麻の實黑ずみ線路ばた犬が通る
妻は荷を揃へ疎開する子に秋立つ
君が征つてから野を見る癖がついた

伊東俊二

新聞をよんでから夏朝白い紙がある机

狛江村に草土史を訪ねる

暮れても土に牛がある勤人は驛からもどる
夕べ淨水場へ道の青草洗れてゐる水
その道よりも近道の蛙がないてゐる
防空壕があり南瓜が咲いてをり奥さんお勝手
トマト畑にはあるトマトコップの水
繪描きの庭として向日葵の花夕日になる

荻原井泉水

山は川は、疎開兒童が來るといふ青田は早（岩代飯坂）

燒原湧く湯をあびてゐる裸夏日のさし

物は切干の茄子ぐらゐ青草は萩に干してある

一雨過ぎて青い凡て桃の山と云ふなぞへ川音

さがして訪ねて暑いトマトも、隱れ家のやうな

主人老體かくしやく大きな桃はだかにて話す

桃ならいくつでも賣る桃の指に腕にしたたり

古林巴水樓

蔭ると庭木も秋もようの硝子戸がしまつてゐる

遠くに富士のはれてどの道も枯桑の道

石に雨ふる木賊のたけ

日が短くなつた木賊のかげ

山から日が顔出すと暑い日で南瓜の花

まだあがりきらないぬかあめが豆のつる

蟻がもう働いてゐる松葉ぼたんの花はにちにち咲く

安齋櫻磵子

好天桃の葉風桃は袋の中にて熟れる

雀のこゑあり炎天塀の影

居常ひとり機臺とあり蹙心とんぼ飛びくる

濡れ糸魂籠めて織る藍の朝顏咲く

國の子泳ぐみづうみの四方みな山

灯を羽蟲舞ふて一家のもんぺ吊り場所

どくだめが匂ふ新しい草鞋の足うらを感じ

中塚一碧樓

家の壁椿の新しい實が青い

泳ぎあがりし巖大きくて巖肌

何に屋根へ上つてゐるこども夏の白雲

夕暗くなつてから持つて來てくれた夏葱

盆過ぎし舟のへさきに朝日てりて

更に覺悟圓扇二本きつちりと置く

草を刈る既に爽涼のひぐき山のべ

松宮寒骨

山から下りて來て梓川みそぎびとに交り

曉方谷底になく駒鳥谷々谺す

松葉牡丹敷きつめて咲く庭の一亭

白石南木花さいて朝霧の林の空氣

玉蜀黍穗に出たある日友來る古い友達

勤勞してゐる工場の事は言はずとまと食べる

沼のぐるり人住んであやめ咲いてる沼

西垣卍禪子

稻のさざめきて蓮田花の一つ二つの立つお盆

氣安う晩のうどんを打ち上げて畑の方の家人

時には炊事の役も茄子を煮る茄子盛るに父

千住農園ひろし白日河原よりのヒマ畑

手の砂を投ぐ秋海に立つて海の向ふ

秋は南瓜の蔓を刈る正安寺さん隣りて焚く

雲のゆるゆると秋汝と對ひて酒酌みしことも（前線の子へ）

編輯餘滴

昔から寄合世帶はうまくゆかないと云はれてゐますが、四社統合の陸社は案外何の問題も起らず、役員は益々結束を堅くし、「俳句日本」の使命に一致協力してゐるのは御同慶に堪へないところであります。それにもかゝはらず、陸社の連中はどうして作品を送つてくれないのでありませうか、まさか嚴選の爲にその名聲？の失墜に恐れをなして敬遠後退したのでもありますまい。體面と地位の保持に汲々として、作品を單に多く活字にしたがる自任大家は過去の雜誌によく見受けられました。今や俳壇は一つ雜誌に統合し、歷史的なる革新の成就を見まして、今日程我らの力の總結集を必要とする時は他にないのでありますから、各人各自の思ふ他の選者へ投句して本誌育成に協力願ひたいのであります。この新俳句人の總蹶起を必要と致します秋に、選者の不滿から結集がにぶるやうなことがあつては申譯ないと存じます。然し、諸君は卍禪子のゐない本誌をも一應考へてみて下さい。比率なぞと云ふは本誌には斷然ありませぬ。俳壇への總進軍は同等の精神によるものでありまして、陸社は陸社としての組織に於いて役員推薦の用意があります。從つて、陸社の發展は正に今後にあるのであります。私は私と共に數十年俳句運動を共にして來た同志の健在であることを信じます。我々の歷史的な仕事はやつと軌道に乘つたばかりであります。今こそ同志は起つべきでありませう。卍禪子は諸君の熱い御鞭撻を期してやまないのであります。

石川　鋭雄氏（横濱）戰病死
重村　百堂氏（鳥　取）逝去
長島夕汀子氏（横須賀）逝去
堀内　冬郎氏（東　京）逝去

謹而哀悼申上げます

投稿略規

一、層　雲　壇　荻原井泉水選
宛先、世田谷區松原町一ノ八三　伊東方

一、海紅句錄（近作抄共）　中塚一碧樓選
宛先、世田谷區上馬町三ノ一〇五〇

一、陸　、集　陸風集共）　西垣卍禪子選
宛先、足立區伊興町狹間八八七

○句數十五句以内、楷書にて清記、居所氏名を詳記のこと。

○句稿は右三氏のうち一人に宛て直接その住所へ送稿されたし、一人一月一稿一選者に限る事。

一、〆切　毎月十五日

一、句稿以外の投稿は本誌發行所宛。但し、當分の間舊各誌の發行社宛に送稿されたし。陸社は舊「新日本俳句」「多羅葉樹下」「白塔」「北斗」の四社へ。

一、購讀誌代の拂込は從前通り舊各誌の發行所宛に願ひます。但し新購讀者に限り必ず「新」と明記して「俳句日本社」へ送金せられたし。

本誌定價

一冊分　金七十錢（送料二錢）
六冊分　金四圓二十錢（送料一冊二錢）
十二冊分　金八圓四十錢（同）

・前金（なるべく振替）で御拂込下さい。
・必ず何月號よりと御指定の事
・御轉居の際は發送部宛御報下さい。

第一卷　第四號
昭和十九年九月廿五日印刷納本
昭和十九年九月三十日發行

發行人　中塚直三
編輯人　西垣隆滿
印刷人　檜山公一
東京都小石川區諏訪町五六
印刷所　株式會社常磐印刷所　東京一二六

東京都世田谷區松原町一ノ八三
發行所　俳句日本社
振替東京一七六〇六四番
日本出版會會員番號一一五〇〇四
配給元　日本出版配給株式會社
東京都神田區淡路町二ノ九

戰線及入營の諸氏の投稿に限り軍事郵便はがきにて差支なし

定價金七十錢

みいくさ集

夏夜星うすきに我が思ふ船團のうごき　山崎多加士
職場こゝにたふれむ機械にいま月の光さす　安藤次郎
露草へ兵の顔と機銃とあかるい　羽根田繁時
兵器部品を並べたりこゝ夏の工場風を通し　若林乙吉
夏草こゝは低いわが立てゝゐる銃　九貫十中花
航空兵わが子あり柿がしつかり生りし空　守矢自由也
蝶もつれてはほぐれては作戰地圖の上　御厨南天紅
警報月朗々と職場太き影　園木六食子
あの顔もあの顔も召された出穗期の村がげん然として　すずきゆきひと
御旗の下にゐる一月一日このスマトラの朝風　西垣碧禪洞
農村特配の鰊十びづつ大根の花夕べなり　高橋良太郎
海が見える生徒達麥刈り先生白シヤツ　木村綠平
供出の桑の皮干したの持つておのおの幼くて學校がそこ　池田詩外樓
青田はしら雲いういうと戰時內閣成立　和田光利
山の青葉に住んで炭やいて來たいよよ戰場に出る　原蝦煎子
水無月殉難の島の浪つづく浪寄せてゐるを　秋山秋紅蓼

俳句日本　第一卷　第四號
（明治四十四年四月二十七日第三種郵便物認可　昭和十九年九月三十日（毎月一回卅日）發行）
昭和十九年九月二十五日印刷納本